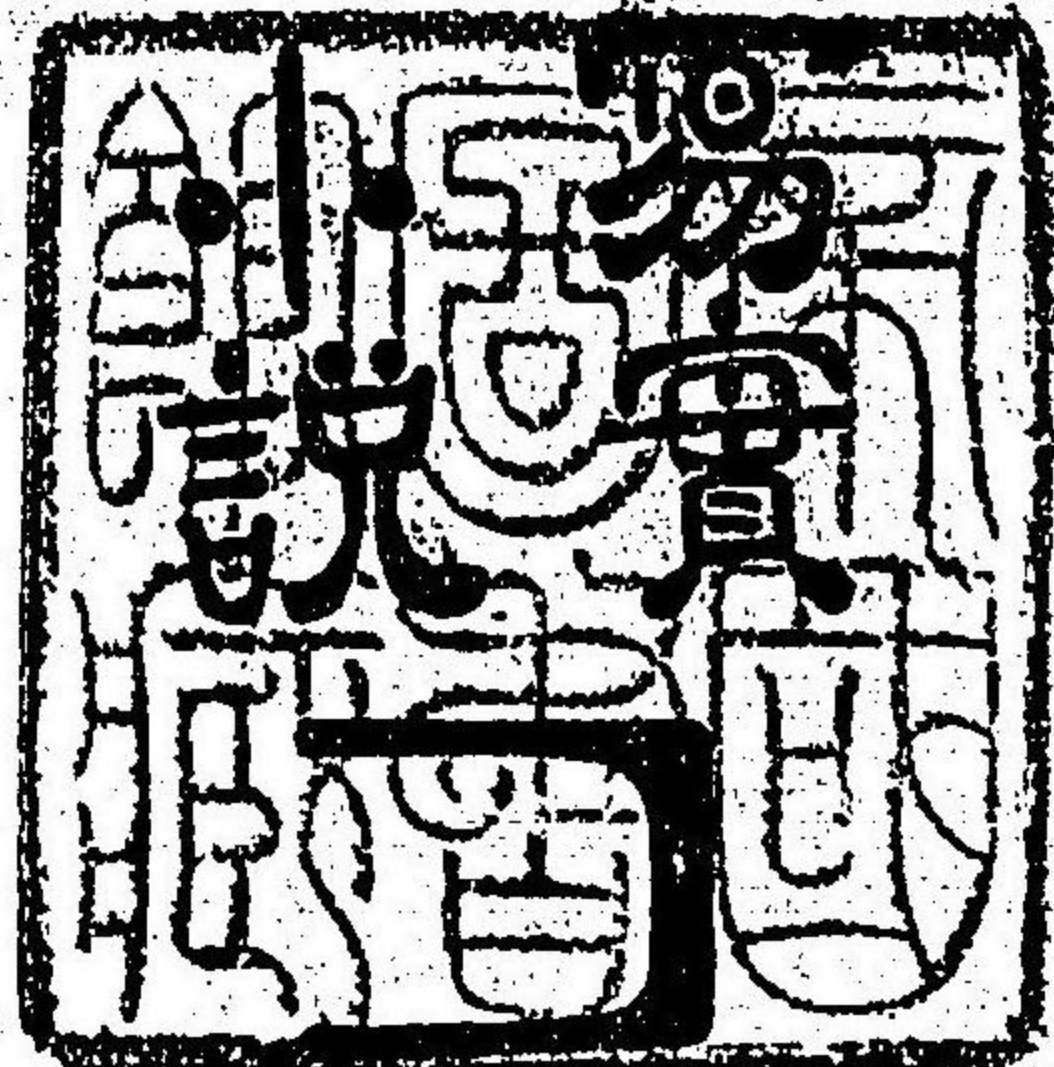


特 13 ~~特 11~~

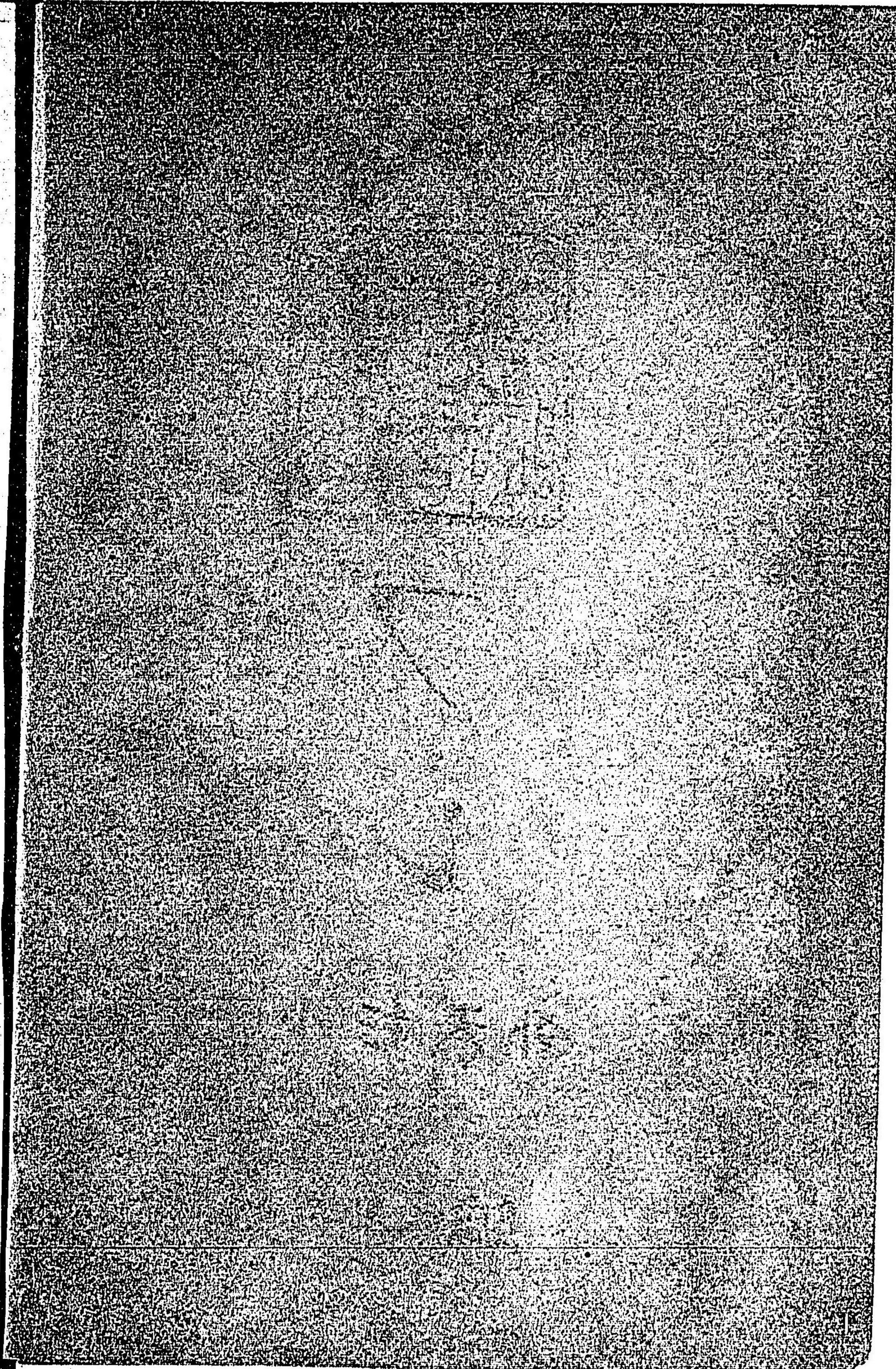
825 ~~446~~



ブ
シ

外天杉小

編 中



はしかき

コブシの發端第一回を讀賣紙上に掲載し始めたのは、三十九年の三月十七日、筆を執つて稿を起したのは其の十一日。前編は新聞で九十五回、六月二十四日に終り、中編は百七回、十一月十二日に終つた。

さて此の作案は、過ぎし三十六年の春立てたものだ。歲月と與に作者の頭も變れば、作案も大に變つたけれど。

コブシとは堅固の事だ、主人公の生涯を表はす爲に撰んだ題だ。一生一代の作と云ふのは、稿を起す時の作者の覺悟をさらけ出したものだ。我が技術の此の上に出ないか否かは、今後の作か證據立てる筈だ。

明治四十年四月

天 外

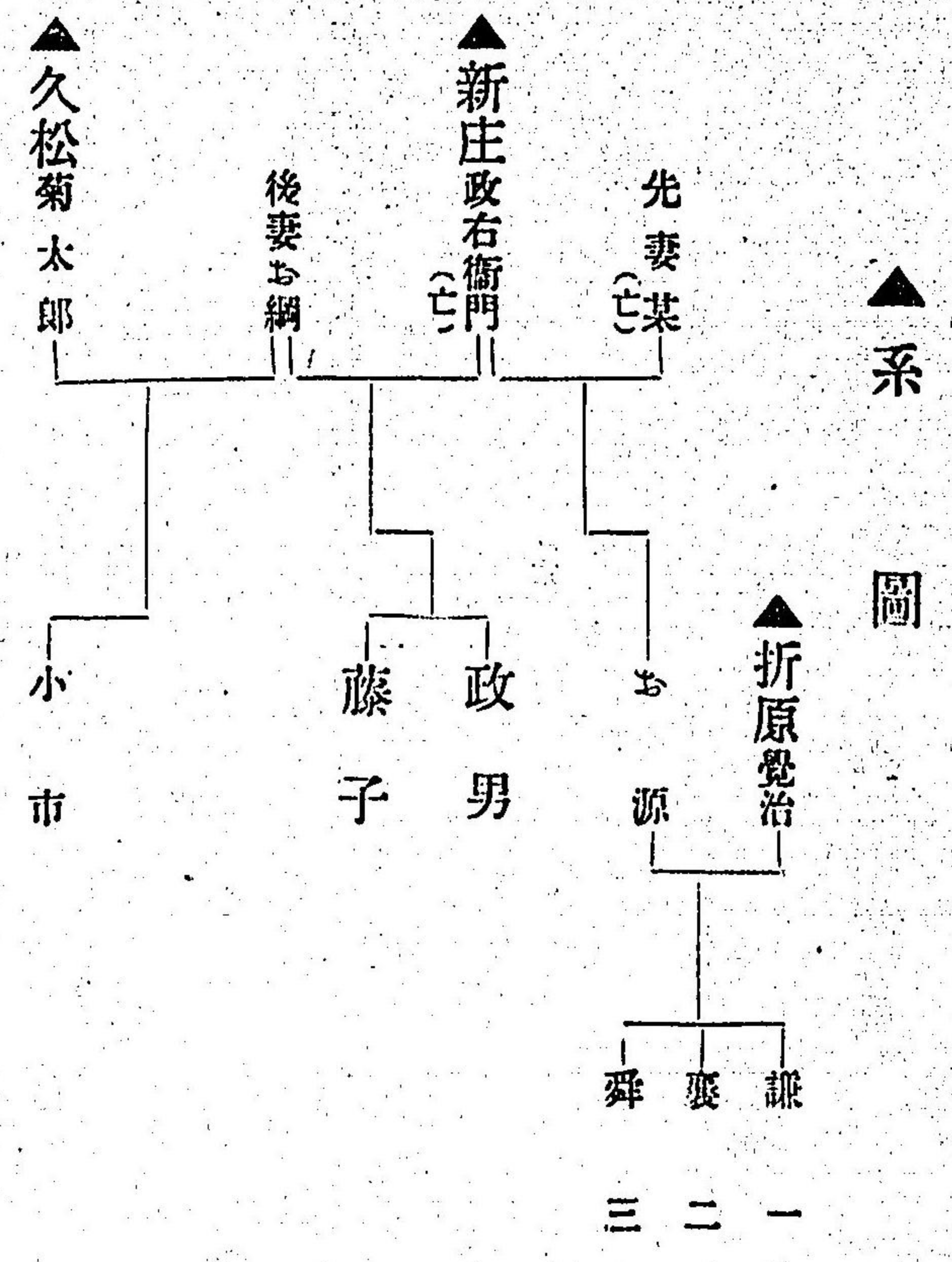
第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一	目次		
母の家	眞紅に成つて(中澤弘光書)	引留運動	三人同盟	昔の眼	妻の艶書(小林鐘吉書)	御殿	やれ文	義姉妹(中澤弘光書)	未來の姉
三〇	一〇八	八四	五八	四六	一七	一			一頁

第十四 アレ奥様(中澤弘光畫) 二八七
まよひ路
肖像(小林鐘吉畫)
第十五 犬 三二九
四邊を見廻して(岡田三郎助畫)

第八 藤子さんだね(小林鐘吉畫) 一四六
外泊
兄妹喧嘩(中澤弘光畫)
英語(岡田三郎助畫)
第九 歸朝 一八七
第十 外交家 一九七
第十一 樹蔭 二二六
平氣で居らっしゃい(岡田三郎助畫)
第十二 會見 二四五
熱い顔(岡田三郎助畫)
第十三 急行 二七三

(1)

系圖

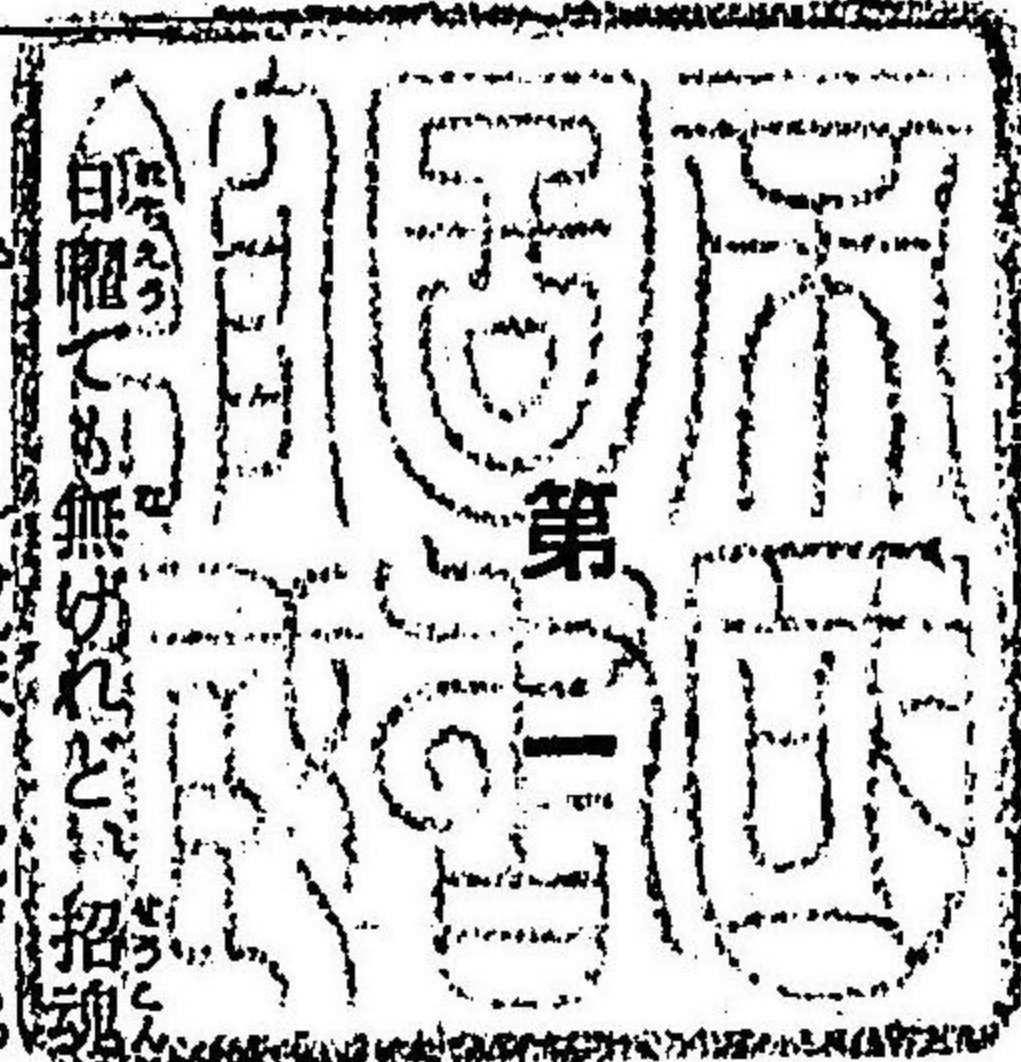


▲系圖

與十四

與十五

(1)



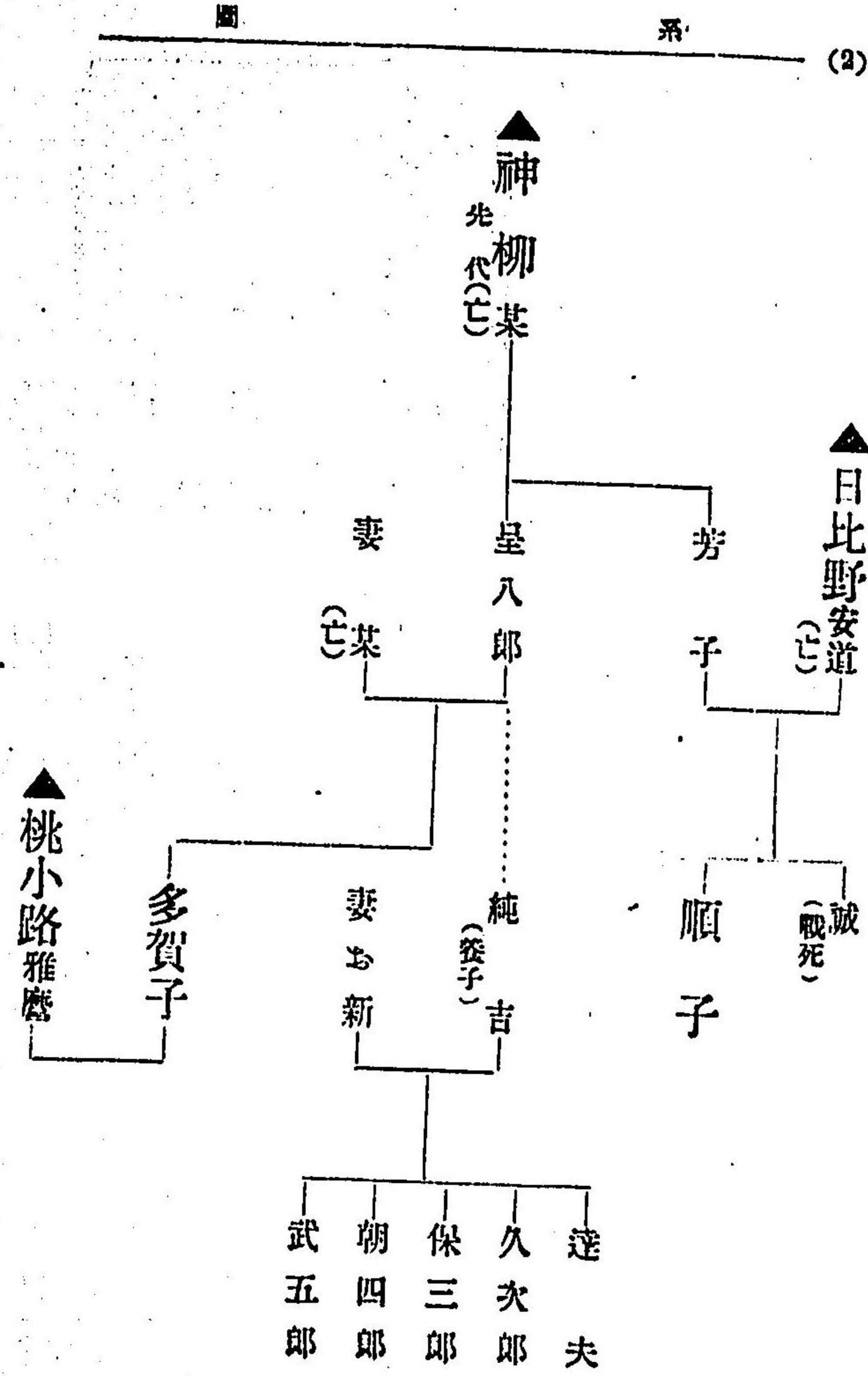
未來の姉

小杉天外作

ユブシ編中

白癡でも無ければ、招魂社の奥庭へ入つて見ると、暇の有る人が其處にも此處にも端々して居る。試験前の暗記物で、最う神經の衰弱しかけた學生、夕飯を旨く食はうばかりに散歩に出た紳士、其邊の小料理屋の二階で、混成酒で染めて來たらしい紅い顔の、小楊枝を捻くりながら、紺股引に鳴草の入つた靴を穿いた親方、悪く上光りのする薄羽織を着て、小形な折靴を大切狀に抱へ、炊婢だか茶屋女だか、正體の判らぬ女と肩を並べて、密々談しながら行く手代、それから高が瓦斯物の單物ではあれど、襟には油垢を防ぐ手帕被けを

(2)



て、兩襟をば高く帯に挟上げて、水色メリンスの長裙を長く見はした始末の良い妻様、それから郷里からの見物を先導の兵士……、その見物と云つても、必しも毛織子の洋傘を持つて、焼印の旅店下駄を穿くと限つたもので無く、中には襪の浅い絹袴の先生もあれば、フロックコートに赤十字の徽章を光らせた旦那もある……。

其様な種々な人が陸續通るが、遅咲きの躑躅、花菖蒲、池の鯉、瀧壺の岩と、目を引く物の多い中で、築山の四阿屋に、列んで腰を掛けた二人の娘の姿は、其處を通掛る所有る足を立止まらせるのである。

『また彼様な人が……！ 體裁が悪いわねえ！』

『構うもんですか！ 見たさや澤山見るが可いわ！』

『だつて……、此方を見て笑つてますもの。歸りませうか？』

『失敬ねえ！ 何だと思つてるんだたら、人形でも有りアしまいし！ 貴女、此方へ來ると可いわ。』

『でも日が射りますもの。』

『あ、良いこと、洋傘を翳ませよう。』

『笑はれてよ。』

『笑ふ物には笑はせて置くが可いわ！』と云ひながら、其の皮色の洋傘をばちんと開いて、美しい肩をすッぱり隠した。

(11)

日光をも人目をも、その洋傘に避けた二女は、美しい頬の觸れるばかり寄合つたが、

『如何だ、見られます！』と一女は態と太い聲で云つて、頸を縮めて笑へば、

『あら、聞えてよ藤子様……。』と一女は氣遣はし氣に背後を振向いた。

『關は無いわ。此様な事を氣にしたら、他日社會へ出てから、何うする事も出来ないわ……。』

『貴女だつて、これから書生するんぢやありませんか！』

『貴女は本當に活潑ねえ！ 私なんぞには到底……。』

『可厭な順子様！ 貴女の様に溫和い女は無いわ、今の談だつて然らうよ、私が貴女なら無

「事ぢや置かないわ、預つた金を返さないなんて……、あの禿頭、叩割つても取つて見せるわ。」

「大變な事を仰有るわねえ、」と笑つて、「悪いわ、貴女の姉婿様だのに。」

「姉婿様だつて、厭な事だ！ 彼様な大言家！ 彼様な敗徳者！ 私は小兒の時代から嫌ひよ、姉様とも、姉婿様とも、私只の一度だつて呼んだ事は無いわ。」

「あら、だつて姉様は本當の姉様ぢやありませんか……？」

「本當だつて嘘だつて、自分の嫌ひな者に、姉様なんて云ふ敬語を拂ふ義務は無いわ！ と云つて、大きな眼に笑を湛へ、「私の同胞は、兄の政男に姉の順子、それだけよ。」

「彼様な事を……、藤子様で云へば。」と紅くなつた。

「だつて、未來の姉様だから……。」と遮二無二云つて了つたが瞬時して、「その金は、總額若干なの？」

「え、何が？」

「貴女の家で、その、折原の銀行に預けて置いた金。」

「若干ですか、何でも……。」と細い頭を捻つたが、「私、熟くは知らなくつてよ。」

「でも、少ない金ぢや無いでせう？ 夫が爲に、今迄出京が延びた位なんだから。」と云つて、對手の微に點頭くのをみると、「貴女の財産の、全部で云ふんぢや無いでせうねえ？」

「え、それは。」

「そんならまあ、何だけれど、併し惜しいわねえ！ その代り、銀行が其様なに成つたら、柄木ぢや最う、誰も對手にする者は無いでせう？」

「え、信用なんぞ、最う全然！ だけれども、整然とね、自分で困らないだけの財産は拵らへて在るんですつて。」

「ぢや隠して在るの？ 呆れた奴ねえ！」と云ふ中、卒に想出して、「あ、然々、彼の喪

二ねえ……、知つて居てせう？」

「え、厭な男よ。」

「彼男がねえ、過日から幾回も邸へ来るんですの。だけれども、銀行が其様なに成つたことなんか、些とも話さないのよ。今考へれば、彼地に居られ無いんで、逃げて來たんだわ

ねえ。」

「邸つて、豊崎様へ？ 貴女を訪ねて？」

「いえ、馬鹿氣な談なのよ。」と藤子の云ふには、

博士夫人に對して失禮した事がある、それを謝する爲めと有つて、土産の反物を贈つて遣したのが、襄二の名の豊崎家に知られた初めである。節子は、その贈物を突返さんともしたが、翻思して其物に相等ふ位の物を送つて遣つた。而ると、襄二からは再た贈物がある、夫人からも詮方なしに再た返禮をする、で、其様な煩さい贈答が四五回も續いた。ところが此の一週間ばかり前、上京の便次と云ふ觸込で、突然訪ねて來て、強て夫人に面會を願つて、何う舌を廻して、何う阿附つたものか、夫から以來間がな際がな、出入して、今では主人の博士とも知己になつたと云ふのである。

(三)

「彼様なに屢々來るのも、詰り野心があるからなのよ、」と藤子は、話し終つて襄二を蔑視

む語調で、「博士や奥様に阿附つたら、何か、地位でも得られるだらうと思つて……。」

「だつて、彼様な人をねえ！」

「本當よ。彼の禿頭の子ですもの、厚顔しい一點張よ。」

「彼様な人がお氣に適るなんて、奥様は何様な方なの？」

「いえ、氣に適るなんて、彼様な人なんぞ氣に適るもんですか……。』と藤子は頭を掉つて、

「奥様は豪い方ですもの、進歩した頭腦を持つて居らして……、それア、交際なんぞ實に巧いのよ。博士の名聲の高いのも、過半は奥様の内助の効よ。」

「其様な豪い方……、それが何うして彼様な事を？」

「彼様な事つて、新聞の？」と聞いた藤子は、順子の點頭くを見て、「彼事なんぞ、元より取るに足らないわ、破落漢新聞の捏造記事ですもの。」

「然うかも知れないけれど、此の通り、政男様が迷惑して居らッしやるぢやありませんか？」

「それを思ふと、私口惜くツて耐らないわ！」

「政男様の停學に就いて、奥様は何様な事を云つて居らっしゃるの？」

「非常に氣の毒がツてねえ、元より冤罪なんだから、私と博士と二人で、他迄も名譽を回復させて上げるんですツて、だから、貴女は心配しないで、勉強を爲つて……。夫ア熱心なのよ……。』と節子夫人を説明したが、忽ち困つた顔色をして、『だけれどもね、如何云ふ譯なんだか、兄様はまた、奥様を嫌ふ事つたら一通りぢや無いんですの、奥様の事を云ひ出すと、直ぐ極面してね、最上止せ止せツて……。私、口惜いと思ふ程よ。』

「如何して？」と順子は乘氣に成つて問く。此頃？ それとも以前から？」

「此の春頃からよ、私の氣の着いたのは。』と云ひながら、帯の間を搜つて、近頃から再び提げる事に成つた時計を出して、『最上四時よ、歸つたか知ら？』

藤子は腰掛を離れんとしたが、順子は尙ほ問續ける、

「何故なんでせう？ 何か事情があるんでせうか？」

「然うですわねえ……。』と藤子は暫く行詰つたが、『兄の事だから、何か意見はあるでせうけれど。』

「如何いふ事情だか、貴女、お聞き成すツた事は無くツて？」

「其様な事を問かうもんなら、撲られツ了ひますわ。』

「あら、政男様が其様な事を……。』

と云ふ時、藤子が不意に袂を引くので、背後を振向くと、刹那に強い葉卷實の香が鼻を衝いて、高く茂つた躑躅の枝の間をちら／＼と、バナマの朝に黒絹の羽織の紳士が登つて來るので、順子は慌て、ひくりと腰掛を立つた。

「可厭な人、凝然して坐らっしゃいよ、慌てる事は無いわ、』と藤子は、態とらしく悠々と腰掛を離れて、『人の家ぢやあるまいし、此處は天下の公園よ。』

「速く來らっしゃいよ。貴女を見て居るわ。』

「可いわ、見られたツて滅らなから……。』

とは云つたもの、流星に氣羞しいか、俯向いて丘を降りるのである。

丘を降りると、遠近に遠く限りの目と云ふ目は、悉な此の二女に對つて注いだ。
 熱き日光斜に走つて、庭師の鉢、園丁の帯、人間の手の渡らぬ限なき行儀正しき庭は、羞
 明いばかりに明るく、路を並んだ二人の服装は、歩む毎に揺る毎に、順子が襦袢の緋縮緬
 の袖の、微な仕付糸のどべも分れば、長からぬ裾を外れて、藤子の足頭の白いのもちらち
 らする。

順子は黒塗の木履、藤子は厚い吾妻草履、一人は少し俯向き加減に、一人は出来るだけ胸
 を突出したれば、並べた肩は水平をなして居る。衣服は何方も紋御召の單物であるが、順
 子は濃葡萄地、桐に立枠の品良さを、撫肩の胸細く着て、帯は褪紅色の縞珍、浪繫に落花
 の古代模様を高く背負揚げ、藤子はまた古代紫地に、芳野龍田の花紅葉、華美なる模様
 柔かな肌を包んで、白と海老茶の牛蒡縞、朱鷺色の菖蒲を暈織の紹縞珍の帯、順子へのち
 相伴に袴を穿かざれば、前の擴がるを氣にして、慣れたる大跨を慎し氣に、順子と揃ふ内
 歩て行く。

行逢ふ人も通る人も、皆な自分等を見て居る氣がして、順子は辛に洋傘を持換へた位、銅

像の下に来るまでは顔も矯げ得なかつたが、

「ねえ順子様、」と突然藤子が云ひ出した「其様な様子ぢや、兄様も必然と倒されてよ。貴
 女、其様な談を聞きぢや無くッて？」

「え、何のお談？ 折原様の？」

「え、私の父様がね、折原に貸して置いた金があるんですッて、私、兄様から聞いた事が
 あるのよ……。其金なんぞ何うなつたてせう？ 取つたてせうか？」

「然うねえ、」と順子は云ひ難く状に「私、熱くは知らないけれど、彼様な様子ぢや……。」「

「倒されたんでせうか……？」藤子は眼を圓くした。

順子は何とも答へなかつた。胸の中では、この春朽木の停車場で、政男と別れた様を想起
 したのである。七八間も来ると、

「そのお金つて云ふのは、幾何なの？ 貴女御存知？」

「私も確乎は知らないけれど、其様な大金ぢや無いのよ、」と藤子は小首を捻つて、「何でも、
 一萬圓以内でせうよ。」「

「一萬圓？ それぢやア、大金だわ藤子様。」と順子は歩を止めた。「必然と倒されてよ。大變だわねえ！」

「然うねえ……。」と藤子も立止つたが、近來の政男が金に嚴重く成つた事を、其事に原因かと疑つて見て、「私、兄様に聞いて見やう……。」

「何して此う、不幸な運にはかり遭ふんでせう！」と嘆息する様に云ふ。

「誰？ 兄様？」

「だつて、お金は倒されるし、學校は此様な事に成るんですもの……。」

と云ふ顔色は、藤子にも在々と悲哀の色に見えたので、

「其様な心配する事は無いわ。」と態と平氣に云つた、學校の方は、博士夫人の盡力で近の中に解決しやうし、折原の金か倒れたにしても、それは財産の一部分である、他日社會へ出さへすれば、兄にも私にも、其位の金などは如何にも成るのだ、「だから、書生中此様な事を考へるのは愚よ。速く行きませう。最う兄様歸つてよ、必定と。」

九段の坂を下りて、急ぐと云つても女脚の、往來繁き街を政男の下宿へと行つたが、順子

は始終沈んだ顔色をして居た。

(五)

勸工場傍の小路を入ると、孰れも商業學校の制服制帽の、十四五人の青年が、何事に激してか肩を撥やかし、聲高に議論などして、靴音荒く急いで來るのに出逢つた。中には兄の室で見覺のある顔も二つ三つ交つて、其の尋常ならぬ眼を光らして、藤子に目禮して通るものもある。それから下宿の門口まで來ると、出合頭に竹盛義四郎が内から躍出した。

「あら、竹盛様！」

「ヤッ！」と武骨な掛聲をして、元來血色の良過ぎる顔を最ど紅くしたが、一寸と麥藁帽を脱つて、突兀立止つたもので。

「久くだつたわねえ。」

(13) 「然うでした……。」と云つた計りて、何か急ぐもの如く「や、失敬します。」別れて格子の内に入つたが、藤子は竹盛の風が可笑くツて耐らなかつた。

「政男様のお友達なの？」と聞く順子も笑つて居る。

「然。何時も彼様な人よ、ほいほい。」と到頭聲に出して笑つて、「だけれども良い方よ。」と一言云ひ加した。

兄は未だ歸らぬと云ふのである。二階へ登つて見ると、机には竹盛の置手紙が載つてゐる。

「何處へ行つてるんだらう？ 厭な兄様だねえ。」

「何うか爲すツたんぢや無いてせうか？」

「其様な事も無いんでせうけれど……。まあ坐りませうよ。」と政男の坐蒲團を順子の前に正した。

「有難う。歩くと暑いのねえ。」と敷物を避けて坐つて、「貴女も紅く成つてよ。」

「然う？」と藤子は手帕で顔を拭つて、「芽ヶ崎は此様なぢや無いんでせう？ 別荘は海岸？ ち廣しの？」

「其様な事も無いのよ。一番良い座敷は、多賀子様のお室に成つてるもんだからね、此處に一緒に居やうて仰有つて、始終お傍に何てしたの。」

「然う？ ぢや威張つては居らッしやらないのね。」

「多賀子様？ 然うですとも、威張るなんて些とも。貴女、明日も會ひに成れば熱く分るわ。」

「何様な方でせう？ 私、明日に成るのが楽しみよ。あ、速く見たいこと！」と思ふ儘を口に出したが、「私の方では忘れて了つたけれど、能く覚えて居らッしやるのねえ。」

「だつて、齡が違ふんですもの、覚えて居らッしやる筈よ。」

「私厭だわ、幼少い時の事なんぞ云はれると……。」と笑ひ掛けたが、「ぢやア、兄様の處も熱く知つて居らッしやる筈ねえ？」

「えい、知つて居らッしやいますとも。種々問うて居らッしてよ、母に。」と云ふ時、藤子は何事か想出して、

「ねえ順子様、芽ヶ崎は廣い處なの？」

「何うですか？ 私、濱邊を歩いたいけよ。」

「廣いのか知ら？」と藤子は首を捻つて、「兄様も、久く彼地へ行つてたんだけれど、多賀

(16)

子様に會はなかつたんでせうか？ 其様なお話は無くツて？」

『え。些ども……。』と云ひ終らぬに、

『あ、兄様歸つて来てよ……。』と藤子は椽側の足音に耳を澄した。

第二 やれ文

(一)

「ちッ、順子様！」

政男は我が室に入るや否や、妹と列んだ品良き英吉利巻の、何時遇つても温順しく、倭幼い顔に包み難たる懐しさ、羞しさの色を徹に暈した順子を見て、吃驚した様に此う云つて突立つたのである。

今しも入口に出迎た下婢は、妹が来て居るとか、澤山に來客が在るとか、何やら囁る様だツたが、政男の耳には其様な事が熟くは入らなかつた。紛れて忘れては居たが、昨日？

いや二三日前…… 四五日前に順子は母と與に東京へ着いたのである。而して彼時に、早速も伺ひす可き筈なれど、叔父の病氣見舞に是から茅ヶ崎へ行く、歸京後は直ぐお訪ね申す可ければ……、と云ふ様な書狀を寄來してあつた。忘れて居た、順子の事は悉く忘れ

(17)

て居たツた、と思ひながら、汚れた小倉の袴を鳴して机の前に坐ると、

「久く！」と順子は行儀正しく繊細な手を突いたが、紅くした面を起して、「お變りも無く
ツて……。母も宜しく申上げてお呉れツて。」

「や。何時歸りました？ 阿母様も御同伴ですか？ 病人は何うでした？」と政男は落着
かね様である。

「母は後から……。私だけ今朝立つて参りましたの、」と逸した眼を再たも政男に向けて、
「叔父は大層宜しくツて。」

而ると藤子は、

「兄様、何うなすツて？ 大變顔色が蒼いことよ。」と云つて順子に、「ねえ、眼も凹んでる
わねえ？」

「然うねえ、」と體裁悪くも眼を上げて、「何だか疲れなすツて……」

「然うですか、」と手帕で汗に成つた顔を荒く撫て廻して、「別に何うも爲ないけれど……。」「
と云ひながら 机の上なる竹盛の置手紙を開封した。

「兄様、順子様は大變に待つて居らしたのよ、」と藤子は、順子を差指いて手紙など讀む
兄を咎める様な語調で、「彼此半日よ。」

「あら、啞、藤子様、と優しく笑つて、「其様なに待つてやしなくツてよ。」

「然うでしたか？」と政男は、其の書状をぐるぐる掌で丸めて、「それは失敬しました。」と
机の下に投込んだ。

「厭な兄様、然うですかだツて。」と上目遣ひに兄を睨めて、「汽車で疲れて居らッしやるの
に、直ぐ来て下すツたのよ……。私の許へ來らした時は、まだ一時間だツたのよ。」

「然うか？」と云つて、順子に眼鏡の面を矯げて、「何か、僕に用事でも出來ましたか？」

「い、え、今日は別に何ですけれど……。あの、」と順子は云ひ澄んで「學校の方は、意外
だ御災難でしたのねえ！」

「學校ですか？ なアに、僕は何とも思ひません！」と苦笑をした。

「それでも、卒業が近いんですのに……。」「と順子は俯向いた顔を起して、「何日から行らッ
しやれるんでせうかねえ？」

「何處へてす？」

「あの、學校へー」

「もう、退學した學校へ、二度と足は投れません！」

「えッー 退學？」と藤子は叫ぶ。

「あら、停學と伺ひましたのに！」と順子の顔色は變つた。

「退學です！」

「マア、何時？ 兄様？」

「何だその聲は、」と妹を咎める如に、「退學が何事だ！ それに就いて、今日も前を呼ぶ心算で居たんだ。」

「本當に退學……？」と云つた藤子の大きな眼には、忽ち涙が溢れた。

順子は口も利き得なかつた。

(三)

「だッて、退學だなんて……。兄様、其様な事に成る理由は無いぢやありませんか？」と藤子は濡れた眼を睜つて、「私は、確に停學と聽いてたわ。」

「確も不確もあるか……。」「と莞爾として、「俺の退學の揭示を、俺が貼つて來たんだ、この上確な事があるもんか。」

「だッて……。兄様は其の命令に従つたんですか？」と兄の斷念めた顔色を呆れて、「何にも辯解しないんですか？ 奥様も然う仰有つたわ、確に停學だッて。」

「なに？」

順子も政男の顔色を視詰めて居たが、奥様なる一語を耳にすると與に、その眼に怒氣の閃くのを認めたのである。藤子は尙も、

「奥様だッて間違へる筈は無いわ……。あの、卒業前の停學だから、一日も速く……。」「止せ！ 彼様な奴の事を。」

「また、」と藤子は怖々にも、「だッて、其事に就いて、奥様から手紙が來て居るでせう？ その返辭を聽いて來てッて、私、頼まれて來たんだわ。」

「藤、まだ止さんか！」と怒鳴ると共に、政男は腕を伸べて、無法にも藤子の横顔をびしやり殴打つた。

「あれ其様な……。」と順子の繊細な身体は兄妹の間に躍込んだ。

藤子は横に倒れたが、その儘逃出さうとして、敷居際で兄を振り返り、

「兄様、私、打れる様な悪い事を云やしないわ……。」

「止せと云ふのに、止せと云ふのに、」と政男は呼吸を喘ませて、「彼様な奴の事なんぞ……。」

「止して頂戴よ、ね、政男様！」と順子はあろ／＼其の筋肉の張つた腕を押へて、「藤子様

だつて、些とも悪か無いんだわ。何卒勘辨して、ね政男様！」

政男は、藤子を睨めて居た眼を順子に向けたが、其の優しき眼には涙を湛へ、顔色をば真

蒼に變へて、わな／＼唇を顫はしてゐるのを黙つて視て、黙つて我が手を引込ませた。而

して、起ち掛けた腰をも卸して、深く溜息を吐いた……、と思ふと、二女には面を背向け

て、何を感じてか凝然と俯向いたのである。

「ねえ、堪忍して頂戴ね、可いてせう？」と順子は政男を覗く様に云つたが、更に背後を

振返つて、「藤子様、此方へ來らッしやいよ。」

「兄様、私もう、彼の女の事なんか云はないから……。」と藤子は、怖々順子の傍に坐つて、

「勘辨して頂戴よーねー！」

政男は久く黙つて居たが、頓て其の顔を起して、

「藤、貴様は何にも知るまいが、今回俺の此う成つたのは、皆な彼奴の爲めだぞー！」

「えッ、何う云ふ譯で？」

順子も其の事情を聴かうと望んだが、政男は其事をば口に出さず、

「藤、今日の中に豊崎の家を出る。寄宿が出来なければ、此家へ來て俺と一緒に居ろ。」

「えー」と藤子は點頭いて、「それは、兄様の云ふ通りに成るけれど……。奥様の爲に此う

成つたツて……？ 兄様、何う云ふ事情だか、それ聴かせて頂戴な！」

「貴様の聴く可き事でない！ 黙つて、俺の命令通に成れば可いんだ。今日の中に引越

了へ。」

「越すわ！ だけど兄様、」と藤子は兄の顔色を窺ひながら、「奥様から聴けば、兄様の爲に

盡して居るッて云ふんだのに……。」

「それが彼奴の……。」と云ひ出して、思々敷く鼓舌して、『まあ可い、貴様には解らん。』

「然う……。」とは云つたが、藤子は尙も尋ねて見やうとして、兄の氣に觸らぬ言葉を考へて居たが、

「おい、新庄！」と突然廊下から、竹盛の聲が起つた。

「竹盛か？ 入れ！」

「入つても可いか？」と紙門をがらり開けて、先刻下宿の門口で逢つた儘の義四郎がのつそり入つて來た。

(三)

順子の姿を一目見ると、義四郎は踏出した毛厘の足を立竦んだが、それでも披開つた單物の襟を掻合せて、窮屈状に腰を卸し、二女の方には一寸と頭を動かしたのみで、

「新庄！ 如何したんだ？」と太い眉毛を釣上げ、温順い眼を光らかにして、息を荒く政男

の顔を視詰めた。

政男も友人の眼の處を視ながら、

「僕は先刻、君の家へ寄つて來たんだが……。」と落着いた態で云ふ。

義四郎は點頭して、

「うん、名刺に書いてあるのは見た。」

「ぢや、彼書を見て直ぐ遣つて來たんだな？」と問くと義四郎は眼で答へるので、『僕も今、君の置手紙を見たのよ。』

「一體如何したんだ？ 今回の出來事がよ。」

「何つて、此う云ふ運命だらうよ。」

「なに、運命？ ぢや貴様……。」と云ひ出して順子の方を瞥と願たが、「新庄、何か、只今用事でも有るのか？」と語調が變る。

「別に用事も無いが……。何故？」

「一寸、其邊まで出ないか？ 少し談が有るから。」と最う麥藁帽を引寄せせる。

(26)

「此處で談せア可いちや無いか……。」

と云ふ處へ、階下から煙草盆を運んで來た藤子は、其物を義四郎の膝近く置いて、

「兄様、團扇は？」

「然う、何處へ遣つたかな。」とのみて、別に捜さうとするでも無い。

「困つたわねえ。竹盛様、お暑いてせう？」

「なアに、其様なでもありません。」とは云つたが、藤子の言葉で氣が着いた様に、何う云ふ譯か、杖から汚れた手帕を擧出した。

「藤子様、失禮だけれど此物。」と順子は、親骨を袴の、小さな我が扇子を出した。藤子が其物を義四郎に取次くと、

「や、これは……。」と紅く成つて、恐縮して、日に焼けた、大きな脂手で、握潰しも爲かねまじく、むんづと計り攪んだが、何う氣が着いてか、その儘其處へ置いて、「新庄、まあ話して聴かせろよ。前には停學だつたつてぢや無いか 矢張り、彼の新聞の記事に聯關した事か？」

(27)

「聯關と云へば聯關だが、馬鹿々々しい話さ。理屈も何も有りアしない、俺の尋問る事を答へろ、答へなさや退學を命ずるつて云ふんだ、それで退學に成つたのよ。」

「誰が其様な事を？」

「校長さ。」

「尋ねる事つて何なんだ？」

「それはね……。」と笑ひながら政男は胡坐を組んで、「僕の、停學の揭示さ……、貼ると直ぐ引裂れて了つたんだ。而ると、校長は僕を呼付けアがッて、誰が引裂いたか知つてるだらう、話せ、話さんけりや貴様と認める、退學を命ずる、話せ……、此う云ふんだ。」

「其様な失敬な事を云はして置くつてあるか！」と義四郎は唇を尖らして、「貴様、何て云つたのか？」

「裂いた者は知つてます、けれど其者は云へません……。」と政男は、其の校長に答へた通りを繰返して、顔色を變へて口を閉ぢた。

「然う云つた限りでか？」

『然らよ。』と唇を咬んだ。

『失敬な奴だ！』と義四郎は拳を握つた。

順子も藤子も、政男の顔色ばかり眺めて居たが、

『ぢやア兄様、裂いた本人が出たならば……』と問ひ掛けても兄は黙つて居るので、順子に『ねえ。』

『それぢやア、他の罪をお被なすつたんだわねえ！』と順子は矢張り政男を視ながら云つた。

『貴様、其様な不法な命令に服す氣か？』

『服さないからッて……』と政男は言葉を断つた。

何か高聲に話しながら、どや／＼と四五人の荒き足音が近付いて、

『あゝ、新庄！』と號令でも掛ける様な林の聲が響いたのである。

(四)

順子は云ふまでも無し、藤子も、義四郎も、驚いて其方を振向けば、半開きの紙門の間に、孰も制服制帽の四人の學生が、愕然とした眼をして、突兀と起つたのである。

『何故入らんのか？』と政男が聲を掛けた。

同級生の林平太郎を先にして、其の肩から顔を出したのは、同縣の岩瀬喬六、端艇家の石原精平、柔道家の成田東介、孰も其組々の代表者で、昨日の校長脅迫運動では、指揮者に推された者であるが、政男には答もせず、室にも入らうとはせず、美しき二人の娘をぢろ／＼と見て、さて小聲で何やら評議を始めたのである。

『如何したんだ？』林……政男は笑顔を示せて、『石原、あゝ。』

『新庄』と林は他の者をも代表して、『一寸と階下へ來ないか……、野村の室へ。』

野村と云ふは矢張り三年生で、運動家でも何でも無けれど、階下の四疊半に溫和しく下宿して居るのである。政男は、

『何故？』此室だッて可いぢや無いか？』

『さや、此室ぢや可くないんだ。』

而ると今迄黙つて居た竹盛も、

「あゝ、行かう、」と腮を突出して「俺も談があるんだ。」

「兄様」と藤子は小聲で、「私達階下へ行つてませうか？」

けれども政男は、竹盛と與に黙つて室を出た。四人の友人も一緒に成つて、六人の青年が、其の階下の四疊半にどや／＼と入つた。風呂へても行つたか、室の主人の不在なることも構はず、思ひ／＼の坐り態をして、知らぬ者と竹盛の紹介も簡短に済むと、

「あゝ新庄、彼の瘦せた美人は何物だ？」

と先づ端艇家が問く。

「貴様の妻君だらう。的つたらう。」と繼いだのは柔道家で。

「あゝ、下らな事云ふなよ。」と林は他を制して、「新庄、今日學生課へ行つて聴いたが、貴様の退學は、掲示を引裂いた者を隠した爲だつてぢや無いか？ 然うか？」

「何の爲めと捜したら、其様な事より他に理屈は無からうよ。」と政男は苦笑しながら、「けれども、彼の場合を考へりや、敢て其事ばかりでも無うな。」

「他に何があるんだ？」

「何も無いがね……。詰り感情さ。彼奴も、自分の職權を揮廻したかつたんだらうよ。」と態と餘所事の如に云ふ。

「其様な事を云はないで、確り話さんか。」と端艇家も迫つた。

「詰り、僕の罪を被たんだな。」と林は膝を進める。

「然う云ふ譯ぢや無いさ。」と云つたが、氣を更へて、「まア、初めツから話さう……。君等も知つてる通り、校長が來いッて云ふから僕は行つたさ、而ると彼奴……。」

政男は詰した。其事は先刻も二階で竹盛等に聴かした通りであるが、地位も違へば年齢も違ふ、思想は尙更違ふ二人の感情は、少な問答で衝突して了つたのである。校長は急に容を

正して、「云はんと云つても云はせる、校長の職權を以て云はせる。」と聲を勵ます、と政男も負けぬ氣の、「何の職權でも、云は無いと云ふ私の口を、何うして開かせるんです？」

「君は校長の命令に従はんのだな。云はなければ君の所爲と推認する！ それで可いかな？」御勝手です！」校則に依つて處断するが、それでも可いかな？ 退學を命ずるぞ！」

「御勝手です！ 罪も無くして僕は停學を命ぜられました、此様な無法な、壓制な、穢れた學校に籍を置くのは僕の耻辱とする處です。」

「これだけさ、」と政男は、固唾を呑んで取圍いて居る友人等を見廻して、「これで退學さ！ 簡短なもんだらう！」

黙つて聽いては居たが、五人が五人とも、政男への同情に胸の蕪くを禁じ得なかつたのである、中にも林は、

「何故また、俺が破いたとは云はなかつたんだ？」と政男の話の終るや否や、忌々し氣に怒鳴つた。「俺だつて、其事に對する考は有るんだ！ 不可ん、貴様は情に制されるから不可ん！」

「林が裂いだつて云や、二人とも停學位で濟んだんだ、」と柔道家も口惜しがり、「自分の外に他の罪まで被るなんて……。」

「それを攻撃したつて不可んさ、新庄の性質だもの、」と端艇家は紙巻筒を竹盛から取つて、「生れ變らなや、林だつて事は云へんさ……。なア新庄？」

「然う云はれると、何だか義侠心で、も行つた如だけれど、然う云ふ事情でも無いさ。」と政男は笑つて、「校長の面を見ると、僕はもう、癪に觸つて癪に觸つて、目が眩んで了つたんだ。」

「だから性質だつて專よ。」と端艇家は、竹盛と目を見合はして點頭いた。而ると林一人は、感慨に眼を潤まして、

「うん、宜し、」と坐中を見廻し、「新庄の退學取消は、僕一人で引受ける！ 諸君は、例の遊説の方を行つて呉れ給へ！」

「貴様一人で引受ける……。」

と云ふ端艇家のみならず、他の眼も皆な林の黄色い顔を眺めた。

「いや、可い、」と林は一人で點頭さ、「俺アこれから出掛けるんだ……！ 取消が成就なかつたら、君等と顔は合はさん……。」

「林、まア待て、」と政男は腕を押へて、「何う爲やうてんだ、俺を復校させ様と云ふのか？ 450。」

「當然よ。離せ！」

「ちや君等は、」と政男は顔を動かして、「まだ彼の運動を行つてるのか？ 彼程僕が頼んだ
ぢや無いか……。止して呉れよ、俺ア彼の學校へなんぞ復る氣は無いなだ。まだ云はなか
つたけれど、俺ア洋行する心算だ！」

「洋行？」と咎める様に云つたのは竹盛である。

「活動の舞台は廣いさ！ 此様な吝な日本なんぞ厭に成つた！」

「それは何處へても行くが可いさ、」と端艇家が云ふ、「併し、卒業してからだつて可たらら
？」

「彼様な學校を卒業したつて何に成るもんか！」

「ちや貴様、何だつて今迄入つてたんだ？」

と林は坐り正つた。而ると他からも、

「四年間の勉強を何とも思はんのか？」

「校長が悪いだつて、學校まで悪い事は無からう？」

「後、一ト月で出来る卒業ぢや無いか？」

「卒業したつて損な事は無からう？」

と口々に攻撃すると、竹盛も、

「新庄、諸君の盡力で復校が出来たら、それに越した事は無いぢや無いか？」

「けれども無効だ！」と政男は頭を掉つた。

「無効な事が有るもんか。何處までも行つて見せらァー！」と林。

「見せるとも。最う過半は……。」と端艇家は他に代つて運動の經過を話した。

それは、政男の復校許可までは、本科生の全部を擧げて、休校同盟を約すると云ふので、
三年の全級は既に一致し、これから手を煩つて二年と一年を説廻る手順までに進んだので
ある……。進んだのであるから、今に到つて政男が復校を拒むとあつては、我々は坊主に
ても成らねばならぬ。何でも彼でも、貴様は復校させられるのよ。」「厭でも卒業させるの
よ。」「よ。」「よ。」

「然うか！」と政男は點頭して、「ちやア、何とも君等に任すさァー！」

此云つて俯向いたが、誰の目にも政男の涙ぐんだのが分つた。而ると林は、

『新庄、未だ聞く事があるぞー』と云つて白い歯を見せ、『新聞の一件を話して丁へ！』

『うん、それは俺も聞かうと思つてた、』と竹盛も笑ひながら、『話せ話せ！』

『新聞の……』と政男が面を矯げると、

『秘すな秘すな、』と艇端家までが、『博士夫人との關係を白状して丁へ。』

『白状しろ？』と政男は紅くは成つたが、友達を咎めた。『何を？』

『可いさ、何が羞かしいんだ？』と林は面白状に、『行つたら行つたつて云へー 貴様は色男だもの……。』

『天の與ふる物を取らずんばか……。』と柔道家は變な聲を入れる。

『然うとも、』と林は引受けて、『行つたつて貴様の罪ぢや無いんだ、貴様の容貌を作らへた天帝の罪なんだ！』

『林、失敬ぢや無いか！』と叫ぶより速く、政男は猛然と林に組付いた。

一同驚いて二人を隔てた、暫くは四疊半の室が裂ける様な騒ぎであつた。

(五)

その騒が鎮まると、ドツと笑聲が聞えた。何を喝采するのか、續いて拍手の音が起つた。二階の二女は幾回か耳を澄まし、幾回か顔を見合はして、只だ階下の様子を氣遣つたが、其の物音が聞えなくなると、頓てまた美しき顔を寄せて、政男が身の上を協議するのであつた。

誰の考も同じ事だ、何あつても復校して、研究科までも修めて、學士の肩書を有つ人に爲なければならぬと云ふのである。けれども、退學までに成つた者を、何したら宥して貰へるだらう？ 二女には其の目當とても無い。藤子は矢張り、豊崎夫婦の力を借るゝより方法は無いと思つた。兄は、何事も夫人の爲に被けた災難の如く云へど、先刻の談の前後から推せば、校長の氣に逆つたのが原て退學に成つたのである。兄に勸めて校長に謝罪させて、一方では夫人に願つて、博士に言葉を添へて貰つたなら、益々目的の達されぬことあるまい。

「豊崎博士つて云やア、教育界で屈指の勢力家ですもの……。彼の方の云ふ事なら、校長だつて必然と肯くわ。」と云つた。

順子も其事に同意はしたが、併し政男は彼程まで夫人を憎んで、豊崎家をば今日中に引拂へと云ふ位である。

「ですから、頼むならば、其の前に熱く兄様へお談なすつた方が可いと思ふわ……。てな」と、また後でも怒んなさると何ですもの……。」

「兄様に話せば、止せて云ふに決まつてるんだけれど、」と藤子は久く迷ふて居たが、
「兄様の復校さへ出来れば、私、打たれたつて關は無いわ。」

「だつて、其様な事に成らない方法があるならば……。」と順子は止めた。

順子とても、復校の手段を考へぬては無、只昨日今日出て来たのみで、知つた手藝も無ければ、學校の事情も分らず、何の方面に何様な運動を頼んだものか、心を碎いても手の出す可き道も無いのだが、爰に一つ、頼母しき人がある、長いこと大臣で、其の社會に勢力の有つた故桃小路侯爵、その侯爵の跡を継ぎたる今の雅麿、その雅麿の夫人たる多賀子……

……、あゝ、多賀子夫人の力を藉るゝより良き手段が世に在らうか！

お手紙ばかりで無く、お言葉ばかりで無く、多賀子様は私を妹と思召して、萬事に彼通り親切にして下さる、事情を打明けて……また調戲れるか知れぬが……打明けてお願ひしたら、快よくお承諾なすつて、智慧も藉して下さらう、力も藉して下さらう！ 御交際の廣

い上に、前代の侯爵の勢力も残つて在れば、政男様の復校位は、左程に困難は無、機にも思はるゝが……、

「それに、政男様の事は、彼様なにまで訊いて居らした位だから……。」と順子は思つた。多賀子と政男とは知らぬ間でも無ければ、一倍親切に盡力して呉れるも知れぬと。思つて居ると、藤子も、兄の怒に觸れぬ手段を考へて、同じく黙つて頭を項垂れて居たが、階下から足音が登つて来て、政男と思の外なる竹盛義四郎が、女ばかりの室へ只だ一人のツそり入つた。

「藤子様、」と義四郎は、二女とは能るだけ離れて腰を卸して、「貴女、知つてるなら話して呉れませんか……。あの、彼奴が……。』と何の事やら、突然に云ひ出して、また突然に口

を嚙んだ。

藤子は可笑さを耐へる様に、

「何ですの？ 竹盛様。」

「豊崎の妻君です、と唾を咽んで、」彼奴は、幾回ばかり訪ねて来ましたかなア？」

「奥様が？ 何日？」

「日外、新庄の病氣の時です！ 始終物を持って来たぢやありませんか……？ 貴女の知つて居るだけの事を話して呉れませんか。」と云つて、政男の机近く馴り寄り、郵便洋紙を捜り出して、鉛筆を把上げた。

「然うですなえ、」と藤子は義四郎の態をまじく見ながら、「其様な事を何になさるんです？ 私、熱く覚えて居ませんわ。」

「新庄の冤罪を雪ぐに必要ですから……。貴方の記憶に在るだけで可いです、」と云つて藤子に顔を捻り、「日外、ポトワインの非常に佳いのを持って来た事がありますな……、彼事は幾日頃でしたらう？」

「葡萄酒を持って来らした……。 彼日は……、初めて熱の下り掛けた日で、新體詩の朗讀會の……。」と藤子は切りに回想へて、「金曜日ですよ、廿三日……、確に然うです、三月の廿三日。」

義四郎は其の通りを記して、
「然うすると、夏蜜柑は廿五日だ。」と獨語しながら鉛筆を走らせて、「彼の日、貴女家へ歸つてから、何か、證據に成る様な談はありませんかッたか？」

「證據？ 何の證據です？」
「何でも可いですなア……。 夫人の歸つたのは何時頃だったとか、博士が何を爲したとか、貴女に何様な話をしたとか……、記憶に在る事なら何でも可いです。」

「だけれど竹盛様、」と藤子は呆れた顔をして、「兄様の退學は、奥様に關係した事ぢや無いでせう……？ 校長に逆らつたのが原だつてぢやありませんか？」

「いや、原は悉皆な彼の夫人から起つた事です……。 豊崎から、勝手な通知をしたから此様な事に成つたんです。」

「まあ、學校へ通知？　ぢや彼の、新聞に出た事を……？」

「然うです。彼奴、新庄に拒絶されたもんだから……。」と云ひ出して、二女の前と氣が付
して直と口を斷つたが、「彼奴は悪婦ですー」

藤子は順子と顔を見合したが、二女ともざつと紅く成つた。義四郎は手持不沙汰に、

「新庄から悉な聴きました。新庄は些とも悪か無し。」と誰に云ふとも無く云つた。

藤子は久く黙つて居たが、

「ぢやア、彼様な事を仰有つたのも悉な……。」と云つて、順子に頭を捻つたが、「私は、騙
されたんでせうか？」

「無論ですとも。」と義四郎は判然云つた。「新庄の學校ぢや、豊崎の通知に重を置いてます
から、それを打消すだけの證據を舉げて示せなきや無効です……。」

「竹盛様」と藤子は急に向直つて、「手紙なんぞ證據には成らなくッて？」

「手紙と云ふと……」

「奥様から兄様へ遣した手紙！」

「然う云ふ物がありや充分ですが……。」と義四郎は身を反して、「何か在りますか？」

「在るわ、幾通も。兄に聞けば分るでせう？」

「いや、聞いても無効です。」と頭を掉り、「最う彼女の事は、是つ限り口に出さんと云つ
てますから。」

「だつて、昨夜か今朝も、届いた手紙が在る筈ですもの！」

「今朝？」

「然うよ。私に、其の返辭を聴いて來いッて仰有つたんだから……。」と藤子は膝を起ち掛
けて、「私、兄に聞いて來ませう。」

「いや、宜うござんす、僕が……。」とのみで、義四郎は急いで室を出て去つた。

「まあ、其様な人か知ら……。」と藤子は眼を据ゑて、眞偽孰にも決しかねる態で、「今迄
は、彼様な親切な方が……。」

「私は目についた事は無いけれど、怖う方ねえ。」と順子はほつと息して、「今迄、貴女を
騙して居たんだわねえ！」

(44)

「然うねえ。然う云へば、今までも怪しいと思つた事もあるわ……。』と云つて、凝然と頭を垂れた。

「藤子様、貴女速くも越しなすつた方が可いわ。』

「越すわ！ 最う彼様な家……。』と涙ぐんだ。

「而して、此家へ來らッしやるよりは、私の……。神柳の家へ來らしつたら？ 遠いけれど、兄様が可いッて仰有つたら？』

「神柳様？ 私なら行きたいけれど……。だつて、明日つから、侯爵夫人が來らッしやるんでせう？ 邪魔ぢや無いの？』

「可いわ、その時は二人同居に居るから……。』

と云ふ時しも、階下から義四郎が登つて來た。義四郎のみと思へば、後から林も入つて來た。

「見ないで棄て、了つた状です。』と義四郎は坐るや否や藤子に云ふ。

「あら。』と呆れる。

(45)

「如何だ君、』と林は二女には顔を背向けて、『此邊を探して見やうか？』

「破いて棄てたッて云ふんだからね、』と義四郎は順子を憚りながらも机の下を見廻して、

「此の中ぢやあるまら。』と紙屑入を出した。

「竹盛様、』と藤子は、女中に問いて見ませうか？』

「ちよ君、その本箱の傍に落ちてゐる物は何物だ、』と云ひつゝ、林は起つて行き、『新聞か…

…や、これだらう？ 在つた在つた！』

「どれ……。』と義四郎も勇んで、其の紙屑を擴げ、『封の儘裂いてあるな！』

「彼奴、矢張り潔白だよ。』

義四郎と林とは顔を寄せて、固く振つた其の節子夫人からの手紙を伸した。

第三 御殿

(一)

「またも『無用之者入る可からず』の制札を勵行し始めたのか、病院患者も、學生も、何處に散歩の姿も見えず、高き梢、長き枝の、綠蔭深き間に、帝國大學の會議所は繪の様に静に立つて居る。」

小使部屋と棟續きの、洋食屋の出店にして置く牛脂臭い戸の間から、料理人とも給使とも兼務の男が、白金巾の職業服に包んだ胸を突出して出て来たが、帝國大學の各教授の營養は、手前一人が引受けて居ると云ふ風に、髪を奇麗に分けた頭を反して、飛石の廊下を手を振つて登つて行くと、行手の其の御殿風の建物の階段から、フロックコートの、小男の、額の深く禿んだ教授が、悲食の麥酒の利目か、それとも香料を嘗め過ぎてか、眼の邊の紅い、汗發んだ顔を手巾で擦りながら下りて来た。

而ると給仕は片隅に立止つて、恭しく教授の通過ぐるを待つて居る。教授は其者には委細關はず、矢張り其の逆上る顔のみを氣にして、手巾を使ひながら下りて行く……と給仕は遙に其の背後を振返つて眺めたが、一寸と小首を捻つて、何う云ふものか其の骨太の、爪を深く切つた右手の指で、滑々した我が顎を一つ掻いて見て、さて急に横手の飛石をついと曲つた。

殿 御

と、其の機に、給仕の入つたとは反對の木立を潜つて、不意に廊下に姿を見はしたのは、例の白つばい小倉の袴に紺紵の單物、筆記帳挾とインキ壺を片手に提げた竹盛義四郎である。四邊を見廻せば、廊下の前後、風渡る庭の木立、何處に目に入る人影も無く、莖弱き草の葉などの、ひらくと動くのみである。義四郎は何う思つてか、我が下駄をば庭に脱捨て、隠るゝ様に階段を駆登つたか、直ぐ其の右手の、重き板戸をぐいと明けた。

中は廣き室で、葉影の迫る硝子戸の彼方の隅には、一人の教授が籐椅子に凭つて、膝に重ねた上靴の足を動かしながら、外國雜誌を讀んで居たが、義四郎の入つた音で、偶とその眼鏡の顔を振返ると、それが豊崎法學博士であるのだ。

中央には大卓子を長く据えて、滴る計りの緑色の毛氈を被けたるが、周囲には幾十脚かの藤の椅子が、行儀悪く取巻いて居るのみ、二三十坪もあるべき室の中に、人と云つては豊崎博士と、壁に懸けた油絵の兵士……奔馬に鞭を加へて、逞しい身體をぐつと反したものと、何時まで経つても壁を動かさずこの無い……其の繪に描いた兵隊さんばかりである。博士は汚い服装の義四郎を瞥と見たのみで、再び讀掛けた雑誌の頁に、その凹んだ眼を戻したのである。義四郎は砂塵を浴びた、爪の黒い、先刻から窓の外に立つて居たので、充血して紅くなつた、脂足の濕つた其の足裏で、織目の堅い敷物を履んで進んだが、博士の傍へ来ると一寸と腰を屈めて、

「先生、失禮ですが一寸と……。」と何處やら吃々して、「私は今朝、お宅へも伺つたんですか……。」と云つて、手持不沙汰に莞爾とした。

「然うか。」と博士は瘦せた面を矯げて、「君は誰だッけ？」

「は、竹盛義四郎。」と名刺代に名告つて、「政治科に居ります。」

「あ、竹盛？」と博士は點頭して、「今朝は來客で失敬した。何だね用事は？ 何か、會て

も組織したと云ふのか、まアお掛け。」と腮で椅子を指す。竹盛は叩頭したのみで、

「新庄の事に就いて、少し伺ひ度い事がありまして……。」

「新庄？ 新庄政男か？」と博士は初めて雑誌を卓子に伏せて、「君も朽木だつたかなア？」

「いや、私は静岡です。」

「ぢや友人か？ まアお掛け……。」と義四郎の腹の中までも見透す機な眼をしたが、「何うだ、一つ橋の騒は——林とか云ふ者は、警察に拘引れたッてぢや無いか？ 試験前に、彼機な騒を爲ちや損だなア……。」

「先生」と義四郎は博士の言を遮る様に、「新庄の操行に關して、何か、彼校の校長へ、先生から報告を發された状ですが……、その内容を伺ひ度いと思ひまして。」

「報告……。」と意外なる言葉に博士も驚いた顔をしたが、直ぐ莞爾として、「彼事はね、我輩は、彼の男の保證人に立つて居つたんでね……。」とのみて口を閉つて、「君は、一體何處から其様な事を聞いたね？」

「新庄からも聞きましたし、彼校の學生からも聞きました。」

「は、ア、」と博士は寛然と其の脇を卓子に載せて、「我輩の報告と云ふと、何う云ふ報告を爲たと云ふのかね？」

「それは分りませんが。」

「けれども、既に報告が有つたと云ふ以上は、その種類、その性質の概略は知つて居なさや成らん筈だね？」

「それは分りません、」と竹盛は博士に翻弄さるゝと氣が着いてか、急に勃然とした顔をして、「分らないから先生に伺ふのです。」

「然うか？ けれども、我輩が報告を發したとして、其に對して、君は何う云ふ關係があるね？」

「新庄は私の友人ですから。」

「友人は分つたが、我輩と彼の學校との間に、假令何いふ通信が有らうと、君等の關係する事は無からうと思ふが……？」

「在ります！」

「ほ、何う云ふ理由で？」

「大にあります！」と義四郎は聲を高く、「先生の報告の爲めに、新庄は冤罪に陥されました、私は飽くまでも之を救はなさやなりません、友人の義務です！」

博士は其の廣さ額に皺を寄せて、

「さ、竹盛、」と椅子に長く身を反し、「君も高等教育を受けて居る者ぢや無いか、我輩の報告の爲めに、新庄が冤罪に陥されたとは何だ？ 亂暴な！」

「いや、決して亂暴ぢやありません。錯誤の報告を爲すつたからです……、先生が錯誤の報告を爲すつたから、それで新庄は、彼様な罰を被つたのです、」と云ひ斷つて初めて椅子に腰を卸し、「先生の報告の爲めと云つても、亂暴な事は無いでせう。」

「錯誤の報告？」

「錯誤の報告ぢやありませんか、事實と相違して居つたら錯誤でせう……？」

「さ、一寸と待たんか……。」と博士は義四郎の口を止めて、「君は今、我輩から發した報

告がある、その報告の内容を知らんから、それを聴かして呉れ……、此う云つたね？」

「は、それは云ひました。けれども、詳細には知らなくても……。」と躁急むをば、

「内容も知らん者が、錯誤とは何だ！」と博士は凜然と構へて、聲も嚴かに叱つた。「失敬な、我輩に其様な事を云つては、貴様の不利益に成るぞ！」

「不利益とは何です？ 私、友人の汚名を雪ぐ爲には、一身の利害など眼中に置かません、若し、正当な主張をした爲めに不利益を招くならば、招いても關ひません、何様な爵を被つても關ひません！」

「其様な事は何うでも貴様の勝手にしろ！」と博士は雑誌を手に把り、「此室は學生の入る可き處ぢや無い、彼方へ行け！」

「いえ、行きません」と肩を擔がして、「その、先生の、報告の取消を感か無い中は、私は決して動きません……！」

「取消？」

「失禮ですが、私は、取消をなさらなさまや成らん、重要な書類を此處に所持して居ります！」

博士は言葉もなく、凝然と義四郎を睨めた。

「若し、取消をなさらなければ止を得ません」と義四郎は云ひ續けた。「他の方法に訴へて、新庄の冤を雪がなさまやなりません、然らなれば、先生の名譽にも關ります……。」

博士は暫く睨まして居たが、

「取消を成すべし書類？ ぢや、吾輩の報告を非認すべし證據とでも云ふのか？」

「然うです」と義四郎は書類挾の中を搜つて、「此物です！」

机の上に出したのは、揉みぢやに成つた書簡の、然も封筒のまゝ半ば引裂いたのであるが、表には町名から下宿屋を記して、新庄政男様、裏には牛込榎町、苗字は謙遜して只だ瀬津とのみなれど、紛ふ可くもあらぬ博士の夫人の筆跡である。

(11)

博士の胸は跳つた、瘠せた顔には血が燃えた。細胞も繊維も、蓋く法理で組織されたる可き優れた頭腦も、此の紙屑に等しき一通の書簡に掻亂されたのである。義四郎は眼を据ゑ

て、博士の舉動を覗つて居た。

『此書が何うしたと云ふのか?』と博士は書簡には手も觸れず、聲は意外にも沈着いた聲で、徐に義四郎に首を捻つた。

『御覽なすつて下さい』新庄の潔白な事が分ります!』と息を荒く云ふ。

博士は二つ三つ瞬きした、而して其の眼を徐々手筒の上に戻したか、言葉も無く把上げて、封筒の中から、破れたれど色摺の繪半切に、假名文字を長く走らせたる書簡を廣げた。その敏多さ手は微に顫へるのであつた。

手跡は悪い方でなけれど、文句は何方かと云へば拙く綴られてある、誤字もある、假名も處々違つて居る、加之に同じ意味の事を繰返してあるので、要を摘めば政男の停學が悲いと云ふ事、その原を尋ねれば悉く我が身から起つた事、生命に代へても必然と名譽を恢復させねば濟まぬ事、それが爲めには如何なる條件でも政男の命するまゝに従ふ事、目には掛つて其の條件を聴かねばならぬ事、折返して是非とも返事を下さうと云ふ事、今迄の様に返事を下さらなければ、強面しいと云はれても私の方から參る、と云ふ様な事であるが、



死ぬる思ひだの、迷へる罪だのと、一字宛を行列さしたら、蓋く旅順港も圍まるばかりに長々と書いたものである。

裂けたる處は裂目を合はせて、博士は其の長き文句を黙讀したか、顔の色は次第に褪めて、讀終つた時は既ら唇まで變つて來た。

「先生、如何です？」と義四郎は、書面から離した博士の眼を凝然と視て、「新庄に不正な點がありますか？ それでも冤罪ぢや無いですか？ 先生の報告が錯誤の報告ぢや無いですか？ 如何です？」

「此様な物と、我輩の報告と、何の關係が有るのか？」

「關係が有ります。先生は、奥様の言を基礎として報告をなすつたでせう？ 然るに、その奥様は、新庄に對して其様な書面を贈つてあるぢやありませんか！ 奥様の供述は虚偽です、従つて、先生の報告は錯誤です！」

「馬鹿な事を云へ。我輩の報告は、此様な物に關係は無し。」

「ぢや先生、ぢや此の手紙は、奥様の書いたんぢや無いッて云ふのですわ？」

「我輩は書面の鑑定人ぢや無い！」とのみて、博士は突と椅子を離れた。

「先生、待つて下さい！」と義四郎は慌て、博士の前に立塞がった。

「何をするか？」

「何もしません、報告の取消を書いて下さい！」

「貴様、何等の資格が有つて、教授たる吾輩に其様な要求をするか？ 失禮な奴ぢや、退け！」

「いえ退きません、失禮ですが退きません。」と義四郎も博士に負けぬ聲で、「取消を書いて戴かない中は、僕は一步も此處を退きません、先生も出しません！」

「無禮者奴！」と怒鳴るや否や、博士は拳を固めて、義四郎の胸を烈しく衝いた。

力は有れども不意を打たれて、義四郎は肥つた身體を危ふく倒れんとしたが、幸に踏耐へて、

「先生、何を為さるんです……！」と博士の腕を押へんとした。

「何を……！」と博士の手は微提くも、卓上から銅製の灰皿を攫んで、義四郎の額に叩き

付けた。

義四郎の眼は眩んだ。猛然と躍上つたかと思ふと、床に地響強く、博士の瘠せた身體は義四郎が腕の下に振伏せられて了つた。

第四 昔の眼

(一)

公然ちての上京でなければ、何處へも通知とは發さぬのに、夫から夫と聞き傳へ、話し傳へて、侯爵夫人を訪問の客は、今日などは朝から絶える時も無いのである。父は云ふ迄も無し、伯母も、順子も、此の神柳家を相續人の養子夫婦も、その八歳を頭に頭是なき小供等、侍女、下婢の端までも、家中の者は悉な應接に暇なき多賀子の健康を氣遣ふ程であるが、交際に熟れた爲めでも有らう、此様な事が好きな性質でも有らう、夫人は些かも疲れた態は無く、莞爾に、機嫌よく、平常よりも活々として見えるのである。孰も身分ある方とは云へ、數ある客の中には、随分意地の悪る相な顔も見えれば、長談話の間には、不快な感も起る可き筈を、此方の夫人は始終牙々として坐なさる、

「何處まで御伶俐で坐らっしゃるか、本當に、お胸の底が知れないわねえ！」と侍女等は

耳語を合つて居た。

その侍女等の控室の縁側を、半白の願鬚を長く生やした、鼻の高い、大きな怖い目の主人の呈八郎が、健康質斯の不自由な脚を曳きながら、どしどし、ばたりと跛の音をさたて通り掛かり、

「こらく、其處に誰も居らんか？」と云ふと、

「はい。」と答へる聲と與に、墨觸りの足音優容に、芽ヶ崎でも附いて居た大年増の女が、障子を出て縁側に畏まる。

「今来て居らるゝのは、何處の夫人かな？」

「はい、姉川様の夫人と仰有いますことと。」

「今は一人か？」

「はい、そのお方お一人様で。」

「然うか？ 大分長い様ぢや喃。もう蹴られるだらうから、蹴つたらばお前、多賀子様へ申上げるのだ、坐敷にばかり居らしては身障に悪いから、些と庭を御散歩なさいと、

…而して、お前も小梅もお伴をして喃。
『は、畏まりました。』

と云ふのを背後に聞いて、羊羹色の單羽織を被た其の骨張つた肩を揺つて、べらべらの嘉平次の袴を穿いた其の病の有る脚を運んで、遙か椽側の突當の、敷居の外に華美な浴衣の片袖の、長く出て居る室に入つた。此處は階下の客室で、中には姉の日比野未亡人と、姪の順子とが、客なる政男に茶菓を薦めて居るところで。

(二)

客室と云つても、中の口から出入の人を導く處で、床にも透棚にも、是ぞと眼に着く物も飾つて無いのに、斜げ掛けの壁には腰紙、それも端々の糊離れがして、裾風でふわふわする云ふ奴。

「叔父様、其方に坐らっしゃいな。」と母の傍に居た順子は、呈八郎の革蒲團を敷居近く持つて立つと、

「さ、元の處に置いてお呉れ。」

「でも、大變お暑うですもの。」

而ると未亡人も、

「本當ですよ、其處に坐らっしゃいよ。」

けれども呈八郎は、姉なる未亡人の下席に、どしりと地響かせて腰を卸し、

「いや何うも」と疲れた如に膝へ其の筋張つた手を突いて、笑つた顔を政男に向け、「失敬

しました。」

政男は把玩つて居た團扇を離して、

「脚は、餘程御不自由の如ですな。それでも、些しは快い方ですか？」

「快いも悪いも、まア此様なものだらう！ 所謂痼疾でな、」と我と我が膝を見廻して、「併し、熱れるとまた、他で見る程苦しくも無い。」

「本當に、傍に見て居ると、起つたり居たりもねえ……。」と姉なる未亡人が云ふ。

「なアに、反つて紛れて可いんです。」と姉に答へて、また政男に「此ら職人でも入つとる

(82)

時は、時々見廻らんとな。」

「叔父様、」と順子は叔父の前に茶を置いて、珠玉の如に艶々する赤櫻子、菓齋の食出して
るワツフル、その二個の菓子皿近く摩寄つて、「何方を差上げませう。」

「私か、私は御免蒙らう。」と呈八郎は笑つて、「其のお對手はお前に頼まうよ。」

「厭だ、彼様なこと。」と政男を見て笑ふ。

而ると未亡人も笑顔をして、

「政男様、遠慮しないで食つて下さいよ。」と云つて、弟に頭を捻り、「ねえ呈八郎様、先刻
のお話し掛けの件ですがね、藤子様を、此家へ同居させて呉れつて云ふお頼みなんだけれ
ど……。」

「お頼みだつて、」と順子は母を遮り、「お頼みぢや無いわ、私がお勧めしたんだわ。」

「まア、お前は黙つても居てなさいよ。」と娘を制して、「ねえ、何しませう。男と違つて、
下宿屋ぢや何様なにか不自由でせうからねえ。」

「まア、其點だて……。政男君、實はなア、」と鬚の重さうな腮を突出して、「私等に異存は

(83)

が無いけれど、近日、侯爵が御歸朝に成ると云ふと、是非とも東京に住まはれる、而ると
云ふと、取敢へず此處を御用立てるんでなア、私等も何うも、退かにな成るまいッて云ふ
内談の起つてる場合ぢやて……。折角越して来る、また動くと云ふ様では、反つて藤子様
が迷惑ぢや無いか？」

「はア、然う云ふ御都合ですか……。」

「だけれども叔父様、」と順子は叔父を覗いて、「多賀子様は、置いて上げるッて仰有つて
よ。」

「なに、多賀子様が……。」と母は驚いた眼をして娘を振り返り、「お前、何時其様な事を申
上げたの？」

「此の間、藤子様がお來ての時に、二人して皆なお話し申上げたわ。」

「然うか？」と呈八郎は笑ひながら鬚を扱いて、「や、小供達には敵はん！」

「本當に、仕様の無いものですなえ。」

「だつて母様、」と順子は羞し笑ひをしたが、頓て其の首を呈八郎に捻つて、「叔父様、可

してせう、藤子様来ても。」

「多賀子が可い云へば可いや。」

「ぢや、今日にも来らして可いのねえ、嬉しかつたよ。」

「それぢや、何卒宜しく。」と政男は、誰に云ふとも無く禮を云つた。

ところに、垣根に沿いて庭へ入つて来た植木屋が、

「旦那様は此方で坐らっしゃいますか？」と椽側近く歩寄つた。

「うん。何用だ？」と皇太郎が頭を向けると、

「旦那様、」と手を突いて坐敷を覗込み、「お指圖通り遣つちや見ましたが、少し面白く無えんで。」

「何處が面白く無いんだ？」

「何うも、下枝が低く過ぎまして、體胴石の頂を隠しつてふんで。」

「それぢや、最う少し左の方へ振つたら宜からう？」

「可けません、裏の切口が坐敷から見えますから。」

「其奴は困つた。」と禿げた頭を撫上げて、「待て待て、今私が行くから。」

「ぢや、何卒一寸と来らしつて。」と一つも叩頭して、落ち掛けた手拭を帯に挟直して出て行く。

「其様な筈は無いんだが、」と皇八郎は獨語して頭を捻つたが、「可いわ、何か他の樹を持つて来やう。」と太儀相に起上る。

「叔父様、日が射つてるから、帽子を冠つて行らっしゃいよ。」と順子も、其物を取りに起つと、

「なアに、要らん要らん、」と手を揮つて、「今の青年とは違ふわ、日光に射つた位でびくともする私ぢや無いんだ。政男君、一寸と失敬するぞ。」と坐敷を出て行く。

政男は軽く會釋したが、

「や、僕も歸りませう。」と其の紺紵の單物の襟を正す。

「まだ宜うござりますわ、」と順子は留めた、「ねえ母様、折角来らしつたんだから、多賀子様にもち目通りなすつたらう。」

「然うだねえ、」と母は考へて、「御都合が何だか？　まあ、伺つてからにしたら可いんてせう。」

「ぢや、一寸と伺つて参りませうね、」と膝を起ら掛けて、「政男様も可いんてせう。」

「はア、」と政男は何處やら氣の落着ぬ態で、「僕は會ふ必要は無けれど、何でも可いんてす。」

「てすけれど、多賀子様はね、貴方の學校の事では、大變御心配下すつてよ。」

「僕の學校？」と政男はゴツと紅く成り、「退學に成つた事ですか？」

「然、私、精しく申上げて、復校の出来るものならつて、お頼したんですもの。」
而ると、母は呆れた顔をして、

「順子や、お前さん、何と思つて居るんですよ、其様な失禮な事を……。お話する計りなら未だしも、お頼したとは何事ですー！」

「だつて私……。」と初めて其の失禮に氣が着いた如に紅く成つた。

「その時、多賀子様は何と仰つたの？」と母は息を咽んで問く。

「あの、私なんぞは、何にも知らないけれども、貧乏を察めて話をして見るからつて……、だから、餘り心配するんぢや無いッて……。」

「まあ、恐入つたねえ！」と嘆息する如に云つて、政男に、「ぢやア政男様、一寸と目には掛つて行らッしやいよ。」

「は、然しませうか。」

「では、伺つて参りませうね？」

と云ふを、卒に母は押へて、

「だけでも順子や、」と儼陶し状に顔を凝め、「お前さん、直々に行くんぢやありませんよ。」

お鈴様なり小梅様なりに、熱く御都合を聞いて、然してから行くんすよ。」

「諾！」と順子は何を嬉しのか急々と出て行く。

(三)

娘が出て行くと、未亡人は紺久留米の單衣の襟から小楊枝を抜いて、お齒黒を塗けた齒を

穿くりながら、

「時に政男様、學校の方は困つたもんですねえ！ 何とか、工夫の付け様が有りさうなもんですがねえ。」

「いや、無効でせう！ 僕の爲に盡力した者さへ退學に成つた位ですから……。」と政男は苦笑して「僕だつて、最う強て入らうとは思ひません。」

「其様な事を云ふもんぢやありませんよ。今迄、試験と云ふ試験は、毎度も優等で押通して來たんですもの、目端の利いた先生方は、最う惜んで坐るに違ひ無いですから。」

「其様な事はありません。加之に、此う騒が小さく成つたんですから、萬一力に成つて呉れる人が在つても、僕ばかり入る譯には行きませんからなア……。」なアに、日本ばかり勉強する處ぢやあるまいし……。」と云ひ出して、直と口を閉つた。

「え、何ですッて？」と顔を見る。

「まだ、確定したんぢやありませんが、實は、僕は、洋行したい希望です！」

「洋行？ 何國へね？」

「行けば米國です。近い中に歸郷して、種々準備を附ける心算ですから、その上で、改めても談をする意で居ました。私が彼地へ行けば、貴女の他に、藤の監督をして呉れる人は無いですからなア。」

「其れは政男様の言だけれど、餘り短氣な様ですなえ。洋行も可いけれども、此方を卒業して、ちやんと、立派な學士に成つてからの方が可いんでせう？ 加之に、此様な噂の立つた處で、不意と彼地へなんぞ行かうもんなら、關々と濡衣を着なさら無いちやありませんか？」

「なアに、自分にさへ疚い處が無さや、世間の噂なんぞ……。」

「さへ、然うは行きませんよ政男様……。」

と云ふ處に、出て行つたとは反對の庭口から下駄の音して、

「暑いこと。」と云ひながら、日向を歩いて來たので、ほんのりと紅く成つた顔を中形の浴衣の袖で被ひ、逃げる様に順子は椽側に上つた。

「あや、お前は何處へ行つたの？」

「母様、お客様はお歸りてね、多賀子様はお庭に坐らっしゃるの。」と母の傍に腰を卸し、政男の方に其の熱る面を向けて、「而してね、然う申し上げたら、あの、お二階へお通し申せて……。だけど、私申し上げましたの、お庭の方が、お涼しくって、反つて宜うございませうって、然したらばね、それが宜ければ、此處へお連れ申せて……。」

「また其様な餘計な事を、」と母は咎める様に、「お庭たつて、植木屋が入つてゐてせう……。」

「いゝえ、裏の方に坐らっしゃるの、あの、葡萄棚の下に。而してね、彼處へ、椅子を持つてお來てつて、然う云つて居らしたつたことよ。」

「然うですか、ぢや行つて可いんですか？」と政男はむくり坐を起つた。

「順子、お前も先導なさいよ。」と云つて政男を見上げ、「政男様、袴の後に垂がつて居ますよ、一寸と穿正して行らっしゃいよ。」

「然うですか？」と政男は振くれた其の紐を結び正すと、

「母様、」と順子は其のインキの染みた袴を笑つて、「兄様の、美しい方の袴を出して上げませうか？」

その中の口に脱いで置いた薩摩下駄を穿いて、人の在らぬ流元の傍を西日に向つて通ると、壁板の上に格子の出窓があつて、斑瑯塗の手水盥と並んで、素焼の水注子が口を出して居る。その室の中からは、此頃生れた計りの赤兒の泣聲が洩れる。

「また生れたのかなア」と政男は、今や侯爵夫人の面前に出んとする忙しい身ながら、思はずも歩を止めて窓を振り返つた。神柳家の養子夫婦は、孰も田舎の親類から來た者であるが、兩人の間には子が多く、毎年定つて一人宛産むと云ふのを、日外藤子の笑つて囁するのを聞いた事もある。また順子母子の上京を訪ねた際、其小兒等の騒廻るのを見た事もある、それで、幾人あるか知らぬが、兎に角小兒の多いだけは肥臆にあるので、偶と耳に

「然うだねえ、だけれども、短かいらうよ。」

「なに、これで宜うござんす。」と云つて、政男は體裁の悪さうに坐敷を出た。

順子も浴衣の襟を搔正しながら急いで、其後に從いて行つた。

(四)

した子猫の様な泣聲では、政男も驚かずには居られなかつた。

「何ですの？」と後から従つて来た順子が訝る。

「いゝえ、なアに。」と曖昧に云つて歩き出したが、心の中では多賀子に會ふ間に臨んで、此様な泣聲を驚いたりなどする餘裕の有るを密に喜んだので。

爵位、財産、其様な物は、他日成功さへすれば自分にも得られる物である。神柳の家族や順子母子などが、幾ら仰山に持映せばとて、自分も一緒に成つて侯爵夫人を憚る事は無い、畏るゝ事は無い、また敬ふ可き事も無いのだ。況して、籍を糺せば老朽軍人の娘たるに過ぎぬ多賀子では無いか！ 昔は遊友達の多賀子では無いか！

只だ政男の氣に懸るは、茅ヶ崎の別荘の窓から出た其の顔である、其の美しい眼である、其の眼が通はした意である。今想出しても胸が跳る！ 何て彼様な眼をして自分を祝詰めたのであらう？ それも解らぬが、藤子から聞いても順子から聞いても、先方では一言も彼の時の事を口に出さぬらしい。忘れて居るのか、忘れた態をするのか、それとも、自分とは知らずは彼様な眼をしたものか？

今會へば何も彼も解らう、彼の時の談も出やう、蓋く先方から問出すに違ひないが、その時は何と答へやう？ いや、待てよ、其よりも自分は何用で多賀子に會ふのだッけ？ 幼な友達と云つても、年始状を交換する間でも無ければ、妹を此家に同居させるのも、戸主と自分との關係で、直接には多賀子へ禮を云ふ事も頼む事も要らぬのだ、

「順子が會へと云ふから會ふのかなア？」と政男は我と我が胸に問いた、「まア其様なもんだ、無意味な談だ……。」

考へながら盛の過ぎた花甘藍、未だ無効花ばかりの黄瓜、濃オリーブ色の茄子などの菜園の間を通抜けると、後から順子が、

「あら、多賀子様は彼所に……。」と驚いた様に云つて、衝と政男の傍を離れた。

政男も其方を振返ると、目指す葡萄棚とは横手に離れて、昔は鐵砲か弓かの的圃でもあつたらしき小丘の、太い松が二三本と、梢の中程から折れた痕ある、下枝の廣く張つた太い椏の根方に、其の人らしき白い顔が、葉蔭の重なる小暗さ木下に、ぱつと目に着く藤色の單衣を着て、凝然と此方を眺めて立つて居るのだ。

(74)

政男は胸を轟かした。列んで行く事を羞かしいのか、順子は一人向を轉へて、畑の間を先に駆けて行く。自分ばかり立つて居るでも無ければ、小丘を的に足は進めたもの、一步毎に胸は亂る、目はちらちらする、耳までが變につ鳴て来る。それでも外見には常と變らぬ態度で、高い背の首を伸して、隻手をば帯にくの字に支へて、隻手は歩と共に揺つて、大跨で悠々へ行つた。

(五)

この邸と云ふのは、神柳家の先代から持續けたもので、古いのと廣いのとで、高輪では名の聞えた一つである。神柳某之守の時代と違ひ、軍人と云つても高が佐官たるに過ぎなかつたので、經費の掛る可き廣き邸に住まつて居るよりは、金に換へて、銀行に預けて、利息を無い物に何年溜めて置けば、そうれ、と友人も親類の者も、呈八郎の前で十呂盤珠を弾いて、幾回か賣る事を勧めたものであるが、頑固一徹の彼は其事には耳を傾けず、身分不相應でも勘定知らずでも、私の目の球の黒い中は、石一つ草一本、他に與つて成るもの

(75)

かと強情を張通して來たが、今は地續きの某富豪から、昔の價に百倍する金を積んで、何卒譲つて貰ひ度しと、願ふ様に所望されるのである、そこで呈八郎は大の得意で、「それ見ろ、經濟だの時勢だのと、口頭ばかり利口な事を云つても、私の先見の明には敵ふまいが……。」と養子の純吉は元より、昔それを勧めた誰彼に、自慢の鬚を扱いて、此の邸は愈よ持續ける事に固めたのである。

けれども、養子は農學士で、農産協會の主任技師を勤めて居るが、其の俸給は辛と一家の口を養ふばかりである、勿論呈八郎の恩給、公債の利息などもあるが、中々此の廣き邸を邸らしく手入が爲續けられるものではない。そこで次第に畑地に廣げて、菓物から野菜の種類を育て、それを一廉の収入に數へる事になつて、裏庭を此の様な眺に變へて了つたが、此の小丘のみは未だ土も崩さず、木立も其の儘に遺つて、品川沖を渡り來る風に、松や昔時を口號ぶのである。

丘に近付けば畑も爪頭上りになる、樹影が身體に射る……、と直ぐ頭の上へ、「サア、風がこらさすのねえ。」と云ふは順子。

「在りませとも、涼し過ぎる位ですよ。」それは多賀子。
夢で見るとは違つて、寛りと、沈着いた、明晰した聲である。茅ヶ崎では離れて顔を眺めたのみ、幼い時の記憶は有れど其れは臆氣に成つて居れば、初めて聞く聲も同じ響であるが、政男は我が胸に在るとは違ふ目前の多賀子を、訝る様に顔を見上げんとしたが、焼杉の庭下駄、白足袋、風に戦く縮緬の、着熟し細き裾模様は、水草の鮮かなるに、華美好きらしき帯は勝色、縹珍か錦か厚板か、光琳風の水は銀糸、杜若には金糸の光るのに、寶石入の帯留……、その目を射る腰の邊までは見上げたが、政男は此の上と顔を仰ぐ事が出来なかつた。

けれども一步毎に丘に登れば、一步毎に多賀子は近くなつて、見まいとしても顔と顔とが、松蔭涼しき微風の中に、眉毛の数も分るばかりに對合ふ。

「まア、新庄様。」と其の明晰した聲が、懐し氣に政男の耳に響いて、「御機嫌宜う。久々ですわねえー」

「は、久瀧く……。」とのみて腰を屈めたが、顔は火と燃えた。

「さ、お掛け遊ばして。」と其處に据ゑた藤の脇掛椅子に、指輪の輝く手を向けて、「順子様、貴女もマア。」

「さ、え、貴女何卒。」と順子は辭退する。

「私のは、今持つて來ますもの。」と云ひながらも、政男の眼の處を凝然と視た。

その眼の色は、交際場を示す愛相の色でも無く、我が身分を謙遜の、龍と打解けた色でも無い。と云つて、何うした意とは分らぬが、政男には、昨日まで毎日會つて居た、親しいと云ふよりは打解けた、何も彼も明し合つた者に向ける、其の隔の無い目の様に解られたのである。

此處へ侍女のお鈴を前に、鐵使ひでもして居たらしき下男が、藤の椅子を摺いて登つて來た。木の根の張つた、据りの悪い處なので、其處か此處かと椅子を動かして、愈よ政男は東向きに、多賀子は順子と並ぶことに成れば、

「あら、私はそれでは……。」と順子は椅子を離さうとする。

「何したの？」と多賀子は順子の手を握つて、「お掛けなさいなねえ。」

「でも、餘り失禮ですもの。」

「また其様な。お互の間に、其様な難かしい物は無い筈でせう。」と笑つて、無理に順子を傍に据ゑる。「ねえ順子様、何年振ても目に掛つたてせう？」と眼は政男に走つた。

「然うてございますねえ、私には何だけれど、あの、私達が栃木へ行つたのさへ、最う八年になりませうから……。」

「然うてすねえ、それでは、彼の年の九月も目に掛つた限りですわ。桃小路へ嫁ぐ事になつたんで、伯母様のお家へ暇乞に行つて、門を出て來ると直さ……。」

「然うてしたか？ 私は忘れしました。」

「貴方は御存知ないでせうよ。」と奇麗な齒を見はして、「お互に、變る筈ですわねえ！」

政男が黙つて居るので、

「何うてございますせうい？」と順子も笑顔で、「途中で逢ひ遊ばしても、分りますまいか？」

「それは分ります、歳月は、形や音聲を變へる力が有つても、眼まで變へる事は出来ませぬもの、眼は昔の儘で居ますもの。」

「はア、然う云ふものでございますか。」と順子は、政男の顔をも見遣つて、「ちやア、眼は赤見の時と同じで居るんでせうか。」と順子はそれを可笑しく思つた。

(六)

政男にも變な言葉に聞えた。何か外に意味の在る事かと、その顔色を視れば、多賀子も直と此方を視結めて、思倣か、其の輝くばかりの美しい眼を惜氣も無く大きくして、聲には出せぬ心の影を、其處から通せんとして居る如くである。

政男は直と眼を逸したが、自分で顔の紅く成つたのが解つた、意氣地も無く胸は頻と鳴る。多賀子はまた、若々として實に美しいのだ、順子と列んで、齡の差も分らぬ程である。細面なれど豊なる肉體、皮膚は紅白く、髪の毛は油の無さに艶々と光つて、健全なる内臓器の、如何に熾に働くかと想像さるゝ。

「順子様から種々聞きましたけれど、」と多賀子は言葉を轉へて、「學校の方は、意外だ御災難でしたねえ。」

「は。なアに、」と政男は半ば面を起したが、急に氣が着いて「それに就いては、種々難有う。」と黙頭いた。

「いゝえ、」と多賀子は笑をみせて、「あの、豊崎博士に傷を負けられた大學のち方、彼の方は、最う癒くち成りてしたか？」

「竹盛ですか？」と政男は苦笑して、「まだ紉帯して居ります。自分が到らない爲に、友人に迄迷惑を掛けさせて……。」

「到らない事も無く、迷惑を掛けたと云ふ事も無いぢやありませんか、」と頭を捻つて、「ねえ順子様。」

「本當でございますわー！」と力を籠れて云ふ。

「如彼いふ騒があつた爲に、反つて、貴方の高潔な性質が發表された様なものですからねえー」

「高潔なんて事はありませんが……。」

「それぢやア、彼だけの同情は何の爲でせう？」

「はア、ねえー」と黙頭く順子。

政男はそれには取合はず、反つて友人の事から洋行を聯想して、

「久し振てお目に掛りましたか、西洋には何年お在て、した？」

遅々と變な事を云ひ出したので、二女とも怪しい顔色をしたが、

「あ、西洋にですか？」と多賀子は黙頭いて、「倫敦に雜と二年、馬德里には三年居りましたけれど、皆な五ヶ年には成りませぬの……。倫敦に居た時は面白い事もござんしたけれど、矢張り、生れた國が一番好いもんですのねえー」

「然うですかなア、」と初めて常の政男に成つて、「私なら、此様な國なんぞ……。何處へ行つたつて、此處よりは可いと思ひますが……。」

「ぢや、何故です？」と政男の口を誘出さうとしたが、黙つて笑つて居るので、「何誰も、西洋へ行かない中は然う仰有るけれど、二年三年と經たうもんなら、それは、故郷が戀しくつて耐らないもんですよ。就中も、私の様な意氣地無しは……。」と笑ふ。

「然う云ふもんですかなア、」と政男は多賀子の言に重を置かず、「それでは、侯爵は、お歸

りになれば最う、西洋へは出でにならぬのですな？」

「何うなりますか？」と云つたが、今迄莞爾な多賀子の顔は、忽ち淋しい色に曇つた。

「侯爵は何時頃此方へお着になりますか？」

「最う、近い中ですけれども……。」と顔は益々厭な色に成つた、聲さへも沈んだ如に聞えた。

ところへ侍女のお鈴が、急いで丘に登つて来て、

「奥様」と恭やしく近く進んで、只今某博士がお來てになりましたと申上げる。

「え、何誰？」

「あの、お醫師様でございます。」

「然う？」と多賀子は點頭いたが、辛と帯の顔色に復つて、政男に、「甚だ失禮ですが一寸

と。後で、何卒彼方へ……。順子様、二階へお伴れ申してね。」

「はア。」と順子も椅子を離れて、お鈴を伴れて降り行く多賀子を見送つた。

政男も、其の紋付の紋の見えぬ迄起つて居たが、

「彼様なで居て、何處か不快いんですか？」と訝かつた。其の博士は、婦人科醫として名高いので。

「御自分では、悪い處なんぞ無いと仰有るんだけど、叔父様が無理に……。」「と順子は何故か紅く成つた。

政男は黙つて頭を捻つた。

第五 三人同盟

(一)

最うお歸りなさる時分ですから、と誘ひる言葉に従いて、づか／＼政男の室に通たのは、竹盛義四郎と林平太郎の二人である。義四郎は未だ頭部に繃帯を巻いて居る。激して居たので、その時は痛をも感ぜぬ程であつたが、灰皿——それで豊崎博士に毆打られた——灰皿の底に微菌でも附いて居たか、それとも、翌日まで放任つて置いたのが失期になつたか、二週間も経つた今でも、毎日の如に繃帯を更へる爲に病院へ通ふのである。

「併し、最う痛は脱れたらう？」

「うん、何でも無いんだ。」と室に入ると麥葉朝を手に任せて放つて、窓の障子をがら／＼と開け、「だが、初めは弱つたよ、戸外へ出ると、皆々俺の顔ばかり見るんだらう……。」

「可いぢや無いか、繃帯の巻つ風が美しつて、惚れてる令嬢があるかも知れない。」と林が調戲ふと、

「俺も然うだらうと思つて、訪ねて来るのを待つてゐるんだ。」と義四郎は澄して、林の紙巻貫を嗅みながら「惜い事をしたよ、戦争當時なら、金鶏勳章は受合だつたんだ。」

「然うすりや、男風は一段上つたんだがな……。あゝ、新調の洋服だと特別に暑い。」と林は其の眞新しい縞セルの背廣を脱いで、床の間に載つてゐる印物の團扇を把り、「令嬢て云や君、日外、此室へ来て居た美人よ、彼女は何物だ？」

「何だか、新庄の許嫁つて云ふ様なこと聞いたッけ。」

「何しろ、新庄の許へは、屢く婦女が来やがるなア！だから此様な結果に成るんだ！」

「然うよ、美男子も樂なもんぢや無いナア」と義四郎は笑つて、「其處へ行つちや、僕等は安全なもんだ。」

「あゝ」と林は急に眞面目になつて、「この頃の新庄は、少し變で無いか？」

「何して？」

「過日まで彼様な意氣組で居た奴が、まだ郷里へも歸らないし、準備と云つても、何一り爲て無いぢやないか？」

義四郎は笑つて、

「新庄だつて都合があるさ。」

「だが、僕等た違ふぜ。洋行なんぞお止しなさい、貴方が行けば、石に化つてひますすとも云はれて居やしないか？」

「石？ 石に化するツて云ふと？」

「石は石さ。話せないなア……。」

と云つて笑ふ處へ其の政男が歸つて来る。

(11)

歸つて来た政男を見ると、袴も單物も、二人には目熱れた服装であるが、買ったばかりの新しい麥藁帽を冠つて居る。義四郎は腹の中で、破天荒な事を行つたな、と思ひ、林も懸

弄し度い様な顔をしたが、口を開くと先づ、

「おい、噓をして来たらう？ 今、貴様の噂をして居たところだ。」

「然うか」と政男は平氣で、先づ義四郎を見「熱いなア。」それから林を顧みると、

「何だ、似合つたか？」と林は我が洋服を見廻して笑ひ、「時に俺ア、明日の一番列車で郷里へ歸るんだぜ。」

「明日？ 大層速いなア。」

「然うさ。旅費は出来たし服装は出来たし、何も躊躇することは無いさ。」と云つて政男を覗く様にして、「貴様は何日行くんだ？ 豫定通りなら、今頃は歸つて来た時分だぜ。」

「俺も、明日あたり立つんだ……。」

「信に成らないぜ、」と林は笑つて、「止められてだつて可けないぞ。」

「何だ？」と云つたが、さつと面を染めて、「また其様な馬鹿な事を云やがる。」

「は、は、は。」と林は高く笑つて、「愚圖々々しないで、速く決行しろよ。それとも、僕等の心配よりは、美人の心配の方が利目があるかね……。」

而ると義四郎は、

「止せよ林。」と煙の中で止めて、政男に「歸らないで用が辨じりや結構だ、然うは行かないだらう。」

「無論よ、歸らないで何が出来るもんか。」と義四郎に答へて、「林、學校から何か云つて行かなかつたか？」

「學校？ 何かあるもんか。俺ア、彼様な學校の事なんぞ、最う夢にも見ないんだ。」

「怪しいなア、」と政男は頭を捻つたが、「昨日ね、突然、學生課から來いッて云つて來たんでね、今行つて來たところよ。」

二人の友人は眼を睜つたが、

「ほー。」と義四郎は呆れる。

「何だッて？ 復校させるとても云ふのか？」

「詰り然うなんだ、」と云つたが、林の顔を見ると急に判然した語調で、「無論僕は拒絶けて遣つたさ。今時分、其様な馬鹿な事が無いからなア！」

「一體何う云ふ譯なんだ？ 何か、新な事情でも生たのか？」と林は思はずも膝を進めて、「何だッて復校させるッてんだ？ その辭柄がよ。その趣意がよ。聴かせろよ。」

「何うて事も無いが、此う云ふんだ、」と政男は作り笑ひして、「日外の新聞の一件さ、彼事に關して、彼事を打消す證據物件があるさうだが、それを内見させると云ふんだ。而して、過日の休校同盟の時には、全く無關係だッたと云ふ、校長宛の始末書を出せ、然うすりや、復校を許すから……、此うなんだ。」

「ふーん、」と林も頭を捻り、「變な事を云ひ出したなア！ て、貴様謝絶つたのか？」

「無論さー！」

「何て云つて？」

「復校の希望は無いから、お謝絶りするッて云つて遣つた……。」

「だが新庄、」と今迄黙つて居た義四郎は、「此處は考へ物だぞ！」

「何う考へるんだ？」

「折角復校させるッてんだから、入つたら可いだらう、而して、卒業證書を取りや可いち

やないか？」

「厭だ、其様な馬鹿な事を。」

「馬鹿な事があるもんか、」と義四郎は紙巻煙を棄て、その方が良いんだ……」

政男は變だと云ふ顔をする、林も義四郎の言葉に訝がった。

「約束はしたけれど、三人一緒に汽船に乗つて、三人一緒に上陸しなやならん事は無からう？」と義四郎は二人を見廻して談話した。「長く費るんぢやあるまいし、一箇月後れると思や、卒業證書を持つて行かれるんだもの……。貴様の頭腦だ、巧く行りや、優等て出られる位は譯は無いんだ。而して、學校の奴等を驚かしてよ、新聞へ肖像でも出さして、堂々として渡つて来るさ……。」

「なアに、彼様な學校の卒業證書なんぞ何になるんだ。」と政男は打消す。

「然らぢや無い、我々の卒業が、卒業證書で出来るッて云ふんぢやないが、三人に一人、官立校を卒業した者の在る方が、多少の信用にもなるぢや無いか……。ねえ林」と其の方を振向き、「然らぢや無いか、君の意見は何うだ？」

「然ら、それも一理あるなア。」

「一理どころぢや無い、其の方が互の利益ぢや無いか？ 我々は先に行つて、十分に調査をして置くさ、然らすりや、新庄だけは時間を無効にする事は無いんだから……。」「と云ひつゝ政男に眼を据ゑて「ねえ、其の方が良いだらう？ 一人の利益は三人の利益だ、同盟事業の爲に、暫く節を折つて試験を受けるさ……。」

「厭だ、」と政男は頭を掉つて「僕の意は最う動かん！ 執ぜ、三人とも退學速て通した方が可い、その方が團結力を強固にするし、社會の刺撃も多い、従つて、成功の快も深い譯だから……。」

「けれども、それは感情論だなア。」と義四郎は反對した。

「感情と云はれりや感情だが……。」「と政男も些か躊躇ふ態をしたが、「いや、止さうよ。それに、判然拒絶けて來たんだもの。また、入れて呉れとも云はれ無いぢや無いか？」

「なに云はれない事があるもんか、」と義四郎は答める如な語調で、「互に成功の爲めには、其様な感情の奴隷と成つちや可かん、一時の恥は忍ばなや可かん……。況して、其

(92)

様な事は恥辱でも何でも無い、林、然うだらう？」

「それは然うだが、」と林は莞爾として、「無理に勧めなくても可いぢや無いか、三人とも此ら運命附けられて居るんだ、これで押通すも面白うさ。」

「それは面白いかも知れんが……、」と義四郎は凝然と考へる顔をして、久く置いてから、

「可かん、君等は感情の眼でばかり見るから可かん！」

「感情の眼？ 或は然うだらう！ 併し、感情の眼でも構はんさ、」と勇ましく云つて、「なア新庄！」

「うん。」と政男は點頭いたが、先刻から忘るゝとも無く紛れて居た、多賀子の面影が偶と胸に浮んだ。何の意味か、何の謎か、今に解けかねる其の言葉の、姿や容は變るとも、眼は昔の眼であるとの一語が、友人等の議論めいた聲に誘はれて頭を擡げたのである。而して獨り胸の中で、「昔の眼！ 昔の眼！ 眼が昔の眼ならば、窓から見合つたのを忘れて居る筈は無い、忘れて居なければ、何故一言も彼の時の事を口に出さなかつたらう……？」と此の頃は癖の様になつて居る事をまた繰返した。

(三)

我が意見の行はれぬと観て、義四郎は其の儘口を閉ぢたが、別に不快な顔もせず、煙草の煙の飛び去る窓から、空地を隔てた洗濯屋の物干に襯衣だの看護衣だの、夕風に服らんでぶはく動く態を眺めて居る。林は片側の銀時計を出し、

「如何だい、少し早いけれど、何處か飲みに行かうぢや無いかい？」

「御馳走か？ 俺ア持つて無いぞ。」と義四郎は云ふ。

「無論よ、フルル財布だ、」と衣兜をかりやくと叩いて、「望なら、藝妓でも何でも奢つて遣らア。」

「景氣の好い事を云つてるな、」義四郎は莞爾として、「御馳走なら飲んで遣らう！」

「俺が介抱して遣らア、今日は倒れる迄飲むさ、」と胸飾を正して、「さ、新庄、行かう！」

「うん、」と政男は俯向いた顔を矯げて、「何？」

(93)

「何を惘然して居やがんだい、」と林は肩を叩いて、「御馳走するから來いッて云ふんだ。」

「何處へ行くんだ？」

「何處でも佳い處へ。僕等は盛に飲むから、貴様は盛に食ふぞ。」

「併し、無駄な散財は止せよ。」

「吝な事を云ふな。」と林は、義四郎を促がして座を起つた。

「可いぢや無いか、林が御馳走するッて云ふもの。行かう。貴様だッて、下宿で食ふよりは宜いだらう？」

「それは可いさ、」と政男も笑ひながら起つて、「けれど、君は酒を飲んでも可いのか、頭に障りや爲ないか？」

「障るもんか、疾から内々試みて居たのよ。」

談はそれに纏つて、綳帯をした義四郎を先に、林も、政男も勇ましく室を出たが、梯子を降盡すと、突然、

「よい、待つて呉れ、帽子を忘れた。」と政男は呼止めた。

「何だい？ 確り爲やがれ！」と林は梯子を登る政男の背後から笑つた、「買ったばかりの

帽子で惜いのか？」

義四郎は其處の柱に肩を凭せて、紙屑の散びつた庭を見遣りながら、

「俺ア失敗したよ。先刻聞いたら、豊崎は最う學校へ出て居るとよ。」

「癒くなッてか？」と林は驚いた様に傍に寄る。

「病院には居る状だがな……。」と義四郎は苦笑して、「俺ア、助骨の一本位は折つて遣つた心算だッたが。」

「重傷だなんて云つたがなア。君は、一體何處を狙つて打たんだ？」

「滅多打ちよ。」

「ぢやア無効だ……。新庄に行らせたかッたなア！」

「ふん。」と義四郎は帽子を玩弄にしながら、「だが、家の中は大變だつと、夫婦別居するんで、小供を奪合つてね……。」

「や、失敬した。」と其處へ政男が降りて來た。

三人は歩を轉しながら、

「別居て云や、夫人は生家へ復るのか？」と林が聞く。

「なアに、夫人の方は家に居るんだとよ。」と義四郎は答へる。

「ぢや、夫の方が放逐だね……。」

「何の談だね？」と政男も仲間に入る。

「豊崎の談よ。」と林は振返つたが、聲を低くして、「新庄、氣を着けろ、色男の末は然ら云ふもんだ。」

靴を穿く林は遅れて、二人は格子の外に出た。義四郎は、夕陽の射る政男の新しい帽子を

視詰めて、眞面目な顔をして立つて居たが、

「新庄、過日話した翻譯なア、彼物、好い鹽梅に談が着いたんだ。併し、處々文章を正さ

なさや不可と云ふんだが。如何だらう、君から、妹に頼んで呉れまいか！」

「彼様な奴に何が出来るもんか！」

「だって、學校での文章家ぢや無いか。」

「少しは出来るだらうけれど、其様な事を爲せると、益々得意に成つて不可……。」

「時に、何店に爲やう……？」と後れた林も駆けて來た。

「何店でも可いが、」と政男は端に立つて歩みながら、「僕なら洋食だ。」

「食ふことばかり考へて居やがら。」

「だって、二人に泥酔はれては迷惑なもの。」

「其様な事を云ふと、盛に酔つて遣るぞ。なア竹盛。」

「然うだ、」と義四郎は笑もせず、「僕は佳い處へ案内して遣らう……。」

と話しながら、三人は壁長き勸工場傍を行つたが、幅狭き小路の向ふから、奇麗な腕車を

驅つて、藤子の威勢好く入つて來るのに出逢つた。

(四)

腕車にも車夫の半被にも、侯爵家の鶴の丸の定紋、透母衣の内には水紅色の布を張りたれば、横から射す光線は、藤子の紅白き顔色を一段と明るくした。

「あッ、一寸と！」と駆過ぎたる車夫を止めて、華美なる薄羅紗の膝掛を脱るより速く、

(98)

素足に千代田草履、緞メリンスの單衣の裾を翻がへして大地に降りたが、兄の外なる顔も居るので、狼狽たる中にも優容に挨拶して、「兄様、何處へ行らっしゃるの？」一寸と下宿へ歸つて下さいな！」

「何うしたんだ？」と兄は、驚の鏡毛を飾りにした藤子の廂髪をちらちら見下ろしながら、「用があるなら此處で話せば可いぢや無いか。」

「此處ぢや何ですもの……。」と竹盛等を遠慮する様に見遣つて、「一寸と歸つて下さいな！」

而ると竹盛は、「新庄、ぢやアね……。」と政男を近く招いて、自分等の落着く可き先方を耳語さ、待つて居るから後から來給へと云ふ。

「失敬だなア。」と政男が頭を動かすと、

「本當に失禮ですけれど。」と藤子も笑顔を見せて會釋する。

て、兄妹は打連れて下宿に入つたか、椽側を歩きながらも、

「兄様、學校から何か云つて來ませんかッたか？」

(99)

「俺の學校か？」云つて來た。何うして知つてるんだ？」

「あら、何日？ 復校させるからッて。」

「詰り然うなんだが……。」と政男は階子を登りながら、「能く知つてるなア。」

「ぢや、入る事に決まッたんでせう？」

「入るもんか、今時分に成つて……。」

「ぢや、復校を許すッて云ふんぢや無クッて？」

「俺の方から謝絶つたのよ。」

「えッ、兄様から謝絶つた？」

「何だ其の聲が……。」

「まア、謝絶つたんですッて？」

「惘然して無いて此方へ入れ。」と政男は机の前に坐つて、「俺に用事でな何だ？」

藤子は兄に近く坐つたが、矢張り呆れた眼を睜つて、

「兄様、何故謝絶つたの？ 而して何するの？ 矢張り學校へは入らない心算？」

(100)

「入らないから謝絶つたのよ。お前は、其様な事に干渉せんでも可い。それよりは、お前の用は何事だ？」

「用てな其の事ですわ……。ぢや兄様は、何あつても洋行なさるの？」

「世様も分らない奴だなア。教育を受けてる者の様でも無い。洋行が何事だ？ 洋行しちや悪いのか？」

「誰も悪いッてや爲ませんわ、洋行なさるなら、此國の學校を卒業してなさいッて、然う云つてるぢやありませんか。」

「世様なんぞ分らないんだ、黙つてろ！」

「私ばかりぢやありませんわ、順子様だッて、多賀子様だッて、衆人然う云ふ意見ですわ！」

「なに、多賀子？」と愕然とした。

「え、私今日來たのは、奥様の代理も兼ねてよ。」

「多賀子様の代理？」

「學校から卒に呼びに來たのなんぞ、悉く奥様の御蔭よ。」

「ぢや、俺の爲めに運動して呉れたのか？」

「然うよ、一昨日の様な蒸暑いのに、終日腕車で駈けて坐らしたわ。」

妹の見る前ながら、目にも顔色にも包むに餘る嬉さが躍つて、

「なに、一昨日終日？ 俺の爲にか？ 何うして其様なに？」と思はず膝も進めて、「ぢや

多賀子様は、俺に……、此方に居る方が良いッて云ふのか？」

「無論然うよ。」と點頭さ、「だから、私と順子様とも頼したら、直ぐ承知して、熱心に運動して下さつたのよ……。」

「お前達が頼んだのか……？」

「然うてせう、頼まれもしないで、誰が運動するもんですか、」と兄を咎める様に、「精しく事情を話して、無理に願つたからですわ。」

「無理に願つた？」と政男は氣の脱けた様に、「然うか！」

「學校から然う云つて來たのも、悉く奥様の運動の結果よ。それを謝絶るなんて、兄様も

(101)

「亂暴ねえ！ 私等は可いとして、運動して呉れた女の勞力を思ふが可いわ！」

「俺ア知らなかつたもの……。」

「假令知らなくつても、學校で入れるツて云ふのに……。」

突掛る様な藤子の言葉を、兄は左程に氣にする態もなく、

「お前今、多賀子様の代理で来たと云つたな……、それは如何したんだ？」

「だから、學校から通知があつたか何だか、それを聞いてお來てツて。」と答へて、「奥様はね、若し、何とも様子がなければ、他の方面を運動するからツて。」

「ふーん。」と政男は鼻で云つて、また「それだけか？ 他には何も無いのか？」

「他には何が？」

「いや、多賀子の……、それに就いての談よ。それを聞くばかりで、お前を遣したのか？ 乗つて來た腕車は多賀子様のだらう？」

「然。急ぐんだからツて、貸して下さつたのよ。それなのに、兄は謝絶つて了ひましたツて、其様な馬鹿な事が云つて行かれるもんですか！」

政男は久く黙つて居たが、
「其様な事を云つたツて不可よ、俺の地位も考へて見るが可い。俺の爲に、現在、二人の友人が退學に成つて居るぢやないか？ 許すからと云つて、俺ばかり復校されるか？」
「無論されませうわ！」と藤子は反響の如く答へた、「兄様の如くても無い事を仰つてね！ 自分が復校すりや、友誼に背くとも云ふんですか？」

「其様な事は無い。けれども……。」と政男は行詰つて、「俺には情に於て忍びん！」

「何故忍び無いんでせう？ 友人に、方向を過らせたらからツて云ふんですか？ ぢや、それが氣の毒だからツて、自分も方向を過つて見せりや、彼の人達は何様な利益を得ますか？」

「何だと藤？ 何時俺が方向を過ると云つた？ 生意氣なことを云ふな！」
「下らない義理に絡まれて、其の儘退學して了や、方向を過ると云ふもんぢやありませんか？」

政男は眼を怒らして、言葉も無く妹を睨めた。

「今迄の勉強は何の爲です？」と藤子は恐るゝ色も無く云ひ續けた。「阿父様も此の學校を選び、兄様も、此校を卒業する心算で、中學時代から、最う十年も苦學をなすつたんでせう、それを、それを、此様な些細な出来事の爲に棄て了ふなんて、兄様は……、餘り意志が弱過ぎます……！」と聲は震へて、頬には涙が傳はつた。

「意志が強からうが弱からうが、俺には俺の料簡がある。」と政男は、妹を睨めて居た眼を反して、「貴様なんぞ黙つて居るんだ。」

「いゝえ黙つちや居られません。」と藤子は頭を掉つた。「新庄家の爲にも、兄様の爲にも、今が大切の場合です。兄様の復校すると云ふ迄は、私は此處を動きません！」

「何でも貴様の勝手だ！ けれども、一旦決心した事は動かかんから、然う思つてろ！」

「何の爲に其様な決心をなすつたんです？」其様な下らない決心を棄てて下さう！」と藤子は眼を擦つて、「その決心と云ふのも、詰り友人への義理から來て居るでせう？ 其様な義理が何ですか？ 自分の成功の爲には、何様な物を犠牲にしたって可いぢやありませんか！ 不義理と云はうが、不徳義と云ふが、其様な、一時の非難なんぞ構うことはありません！」

「他日成功さへすれば、友誼に報ゆる方法も立つし、自分の心を明す機会もあるぢやありませんか……！」

「其様な事は、貴様から聽く事は無い、俺は熟知つて居るんだ！」

「知つてるならば、何卒それを行つて下さい。また、彼の人達だつて、兄様の復校は喜んで呉れるに違ひありません、若し、これに反對する様な人達なら、友人とする價值は無いんだから、怨まうが誹らうが關ひません、今の中絶交して下さい……！」

「え、頬さい奴だ！」と政男は聲を激しく叱つた。「黙らんと撲るぞ！」

「撲られても宜うござんす、私の言ふ事が道理だと思ふなら聽いて下さい！」

「貴様なんぞには解らないんだ、俺の事業は、彼様な學校の卒業證書で出来るのぢや無い……！」と云ひ様、政男は帽子を持つてむくりと起上つた。

「何處へ行らッしやるんですよ、待つて下さいな。」と藤子も慌てて起つて、兄の前に立塞がった。

「何を爲るんだ？ 退かんか！」

「ぢや兄様、兄様は……。」と涙の溢るゝ眼に兄を視詰めて、「何らあつても復校して下さい無いですか？」

「俺だつて、熟考に熟考を重ねて決めた事だ……。貴様なんぞ、何も心配する事は無い。」と押退けて出やうとする。

「待つて下さいよ……。」と兄の手を攫んだ。

「何だ？」と起止つたが、「恐ろしくして無くて云へー」

「ぢや、ぢや、多賀子様へは、兄様から話して下さいよ……。」

「何？ 何を話すんだ？」

「私も順子様も、彼様な無理に頼んで置いて、今時分、兄は復校する氣が無いなんて、其様な勝手な事を云つちや行かれせん、だから、兄様から直接に謝絶して下さいよ。」

「俺の頼んだ事ぢやあるまいし、其様な事は俺は知らない！」

「貴方自身で頼まないでも、衆人、貴方の爲に奔走して居るぢやありませんか！ その勞を思つたら、一言位述べて呉れても可いでせう……。」

政男は黙つて居る。

「現在、友人への義理だと言つて、退校までならんてせう……。其様な義理を重ずる人が、何は自分が頼まないからつて、多賀子様へは黙つて、済むんですか？」

「宜し。それぢや云つて遣る。」

「何時来て下さいませう。」

「何時でも俺の都合ですよ。」

「其様な事を云は無いで、今夜にも来て下さい！」

「え、離せ。」と妹を突離して、「都合が好きなや明日にも行つて遣ら……。」

とばかりで、藤子を置去りに、足音高く梯子を降りて行つた。

第六 引留運動

(一)

この頃は試験最中で、學友等は眠る時間さへ惜んで居るが、政男と義四郎とは、洋行準備の爲に暫し歸郷する林を態々新橋まで見送つたのである。

『速く出て来いよ。』『貴様も速く歸つて来い。』『誰の準備が速いか競争だ。』など、言葉を交して別れたが、停車場を出ると、政男は義四郎と路を變へて、高輪なる神柳邸へと出向いた。試験中の藤子は未だ歸つて居まい、けれども再出直して来るよりは、と思つたのである。

明日は自分も郷里に歸つので、妹にそれを告げ、妹を托んで置く順子母子にも、一通りはそれを話さねば濟まぬのだ。それから侯爵夫人に對しても、妹などが彼程までに云ふのだから、若し會ふ機会があれば、一言の禮位は述べて置かう……

『自分で頼んだ事ぢやあるまいし、眞の一言で可い、若し會へなさらや、誰かに傳言して貰つても可いんだ……』

此様なに考へて門を潜つたが、玄關前には馬車があつて、帝國ホテルの半纏を被た馬丁が卷簾を契んで居る。多賀子には客があるのだ。毎度の中の口から入つて、先づ日比野の未亡人に會ふと、頓て順子も出て来て、二人で言を重ねて復校を勧めるのである。

政男は其の勸告を聽いては居たが、藤子を對手にした様に反駁するでも無ければ、自分の意見を二人に了解させ様と力むるでも無く、聞かれた事は簡短に答へて、終には只だ、

『最う決めて了ひましたから。』とのみ云ふ。

その動かぬ意を順子は悲しく感ふたが、併し藤子と申合はせてもあるし、多賀子に頼んだ事もあるのて、客が歸つたならば、藤子が歸つたならばと、只だそれを待つて居た。辨當を持つて行つた藤子は、まだ三時間も経たねば歸らぬと云ふ。政男は明日の支度もあるのに、便々と此うして待つて居るより、下宿に来たる可き置手紙でも書かうかとも思つたが、最う時分だからと晝飯の膳を出される、それが過ぎると、

「最うお客様はお歸りですもの……。」と順子は飽くまでも留める。

「僕は急ぎますから、貴女から宜しく。」

「でも、多賀子様に由上げてあつてよ。」

「僕の來たのを。」

「然。多賀子様も是非お目に掛り度いッて……。」

其様な事を云つて居る中、庭を隔て、砂利を軋る馬車の音が聞える。

「そーら、お歸り……。」と順子は耳を貸して、居たが莞爾して「一寸と御免遊ばせ。」

多賀子へ都合を聞合せるのであらう、政男に會釋して、急いで廻り縁を客間の方に行つた。

(二)

庭の木立の頭を越して、水蒸氣多き空に續く白金、澁谷の茂れる葉蔭、その葉蔭の間に煙を吐く煙突の頭など、一目に眺めらるゝ縁側に椅子を滑出して、如何の談話の後か、多賀子は莞爾かな顔にはたたくと團扇を動かせば、順子は頭を長く對手を見上げて、

「ですけれども、母は如彼いふ人でございますもの、思つて居たッて、云つて呉れ無いんですわ。」

「伯母様が仰有れない位なら、私なんぞ尙更でせう？ 政男様に對して、其様な事の云へる關係は有りませんもの……。」

「だッて貴女は、彼様な運動なすッて下すッたぢやありませんか……。今更、復校しないなんて云はれては、非常に迷惑をするからッて、然う仰有つて下すッたら……。」

「迷惑だから復校なさッて？」と多賀子は呆れたと云ふ如に笑つて、「其様な事が云へるもんですか？ 何も、迷惑はしませんもの。それも、政男様の依頼ぢや無し、云はゞ、私の酔興でした事ですもの。」

「でも、お頼みになつた方々へ、またお断りしなければ成らないでせう？ 御迷惑ですわ。」

「なアに、聞ひませんよ、一寸と通知すれば済むんですもの……。」「と云つたが、小首を捻つて、「それぢや何ですか、明日お郷里へ立つて、お金でも作らへる心算ですわね？」

「大方、其様な事ですわよ。」

『それ迄計畫なすつたんぢや、幾ら留めたつて順子様……。』
 『いえ、留めるんぢやございませんの、迫めて、本科だけ卒業してからにッて申します
 んで……。貴女の御意見は何うてございませう。』
 『それは最う、卒業なすつてからの方が無論だけれど。』
 『それぢやア何卒、一言仰有つて下さいませ……、卒業證書を持つて行けば、持つて行
 つたゞけの利益はあるからッて。』
 『それだけの事なら、云つて云へない事はありませんがね、』と多賀子は考へる如に、『突然
 私から、其様な事を云ふのも變なものですねえ……。』
 『變な事はありませんわ、彼地の事情を御存知なんてすもの。』
 『ぢや此う云ひませうか、』と笑つて、『政男様が行つて了ふと、順子様がお困りだから、行
 くなら何卒御同伴にッて。』
 『あらー』と順子は眞紅に成り、『其様な事を仰有つちやー』
 『何故？ 可いでせう。』

『だッて、私はかりぢやありませんもの、藤子様だッて……。』
 『ぢやア、アア此處へお呼び申ませう、然うして待つて居らッしやるんだから、ね。』
 と云つて、多賀子は侍女を呼び、政男を此室に案内すべしを命ずる。
 而ると順子は、
 『多賀子様、政男様が來ても、今の如な事は仰有らないでねー』
 『アア、何うしませう。』
 擲擲はれると知りつゝも、
 『あら、お虐め遊ばしては……。』とまた紅く成つた。
 (三)
 順て政男は椅子を登つて來た。南に面した戸隙子は悉く脱して、天上高さ十疊の室の、絨
 氈の模様鮮かなるに椅子を動かして、それをば政男の席に、多賀子と順子とは唐木の小卓
 を間に、欄干を背に椽側に相對して居る。

「大變お待ちになりましたッてねえ、」と多賀子は愛相好く聲を走らす、「何うも失禮致しました。さア、何卒お掛けなすッて。」

「失禮します、」と政男は、云はるゝ儘に自分のみが一段高き椅子に、二女を見下す様に腰を卸して、「え、私は、昨日妹から聞きました、今回は飛だ御手敷を願つた状でして……。」

「い、え、彼様な事なんぞ……。」と多賀子は打消す様に云つて、「何ですか、學校の方は、最うお入りに成らない御決心だとかッて……、本當に然てすの？」

「は、學校へは最う入りません、」と政男は他事の様に云つたが、「併し、御厚意は感謝致し……。」

「感謝なんぞ爲て戴く理由はありませんもの……、學校から然う云つて來たのは、貴方の技倆を惜んでなんですから。だけれども、何故お断りなすッたでせう？ 私等の考へならば、些の事で、御卒業なすッた方が良くと思ひますけれど、」と云ひながら顔を横に、「ねえ順子様。」

「はア、」と順子は黙頭して、「最う、卒業論文までお書なすッたのに……。」
其處へ侍女が紅茶を運んで來る。多賀子は角砂糖を匙に載せて、
「論文も惜いけれど、これ迄の御勉強がねえ、」と云つて政男を見上げて、「米國へ行らッしやるとか伺ひましたが、それは、お急ぎに成る事情でもあるんですか？ 餘り立入つて失禮ですけれど。」

「事情と云ふ程の事ありませんが、此地に愚圖々々して居つても詰りませんからなア！」と政男は意味も無く笑つた。

「試験をお受けに成るのに、何が愚圖々々でせう？」と多賀子は優しき眼に政男を睨めたが、「貴方は其様な事を仰有るけれど、藤子様の心配は、夫は、お話にもなりませんよ。彼ばかりの齡に、此様なに苦勞をさせるのかと思つて、私、本當に同情してしまひましたよ。」

「なアに、藤なんぞ解りませんから。」
而ると順子は、



「政男様、其様な事を仰有つて、貴方酷いわ。」

「本當にねえ、彼様な兄様思ひを……。」と多賀子も優しく咎めた。「然うばかり仰有らな
て、藤子様の云ふ事も少しは聴きにやらなや。」

「彼様な者の云ふ事を聴いた日には……。」と政男は笑ひながら云つた。

「まあ、大變なお蔑してすねえ！」と多賀子は眼を瞬つたが、「女と云ふ者は損てすねえ、
彼様な立派な意見も容れられ無いんですもの……。」だけれども、新庄様……。」

急に語調を更へて呼掛けたので、政男は、

「はア。」とその顔を見る。

「貴方の復校を望む者は、藤子様ばかりぢやありませんよ、最う一人、爰に熱心に希望し
て居る人がありますよ。」と笑顔を傾けて、「ねえ順子様。」

「あら、多賀子様。」と真紅に成つた順子は、辛に會釋して、慌て、席を外した。

その後姿をば多賀子は笑ひながら見送つたが、頓て政男を振り返ると、

「何して如彼温順いでせう？ 逃げないでも可いちやありませんかねえ？」と云ふと、こ

れも體裁惡る氣に只た俯向くので、多賀子は益々可笑い眼をして、『ですが、新庄様、誰が引留めても、此方を卒業しずに行らっしゃるお心算ですか？』

『まア然うです！』

『それと云ふのも、矢張り友人方への義理を重んじてはどうか？』 ぢやア、若し爰で、其の友人方も、復校を賛成したなら何うなさいます……？』と多賀子は頭を傾けて、『それでも行らっしゃいますか？』

『はア。』と只だ笑顔を作つた。

『行らっしゃいますか？』と、返事を迫る様に云つたが、『實は……、藤子様も然う云つてお居て、私、が私の考へても、熟く事情をお談したなら、友人方だつて、復校を望むとも、決して不賛成な筈は無いと思ひますが、如何でせう？』

『無論、友人は悉な復校を勧めます。』

『其の友人方も……？』と更めて政男の顔を視詰めたが、『それぢやア新庄様、誰にも遠慮する處は無いてせう？』

「いや、遠慮して復校しないのぢやありません……。」と政男は直ちに答へた。
 「それでは、何う云ふ理由ですの？」と云ふ處へ、若い侍女が菓子と恭しく持つて出たので、「順子様は階下に居らっしゃるの？」此方へお伴れ申しなさい。」と言付けて遣り、また政男に「何か、混入た事情でもお在りですか？」
 「事情も何ありませんが……。」と政男は急に面を起して「最う、然う決したんですから。」

『でも、見す見す不利益と知れて居るのに……。』

『左様、不利益かも知れません。けれども、不利益だからと云つて、一旦決した事を更へるのは厭ですからなア！』と破れ被れの如に云つた。

『厭だからッて貴方……。』と多賀子は久く呆れた眼をして、「失禮だけれども、御家の名譽……、阿父様の名譽、藤子様の身の上……、悉な、貴方が擔つて居らっしゃるんですもの、大概の事は忍びにならないんぢや……。』
 『併し、決心を翻へしたからッて、誰の名譽にも成りませんから。』

『え？』と解せぬ頬に笑を刻んで、『と仰有ると……』

(四)

薄曇りながら、檐近ければ射込む光線の強く、其の艶やかなる頬、長さ頸筋、緑色が、つた紋御石の、婀娜かなる肩の上を斜に滑りたれど、顔には濃く蔭を曳いて、其處に動く情の色は判らぬが、直と政男に据ゑた力ある眼の中に、言葉の外なる異様の影が輝いて居る。芽ヶ崎で見た窓の目が此れである。開放した此室には、對坐の二人の他に誰も居らぬ、侍女も梯子を降りた様子で、廣き二階の執の室にも、蓋らく今は誰も居らぬらしいが、何だッて多賀子は此様な眼を爲るのであらう。政男は胸を藏かしたが、

『然うだ、交際界で養得た習慣だ、無意味で態を演つて居るのだ……。』と他方を向いて、昨日藤子を突離して下宿を出た時から考へて居る、其の多賀子の解釋を漸く想出した。それを想出すと、續いて三人で昨夜誓ひ合つた事、我が手配す可き金高、旅行券、彼地へ渡つてからの困難なる計畫などが、一時に雲の如に胸に湧いた。

『では、復讐なすつては、』と多賀子は、對手が黙つて居るので再云ひ出す、『何か御名譽を損ずる様な事でも……?』

『其様な事はありません、』と政男は固唾を咽んで、『今の場合は、名譽だの利益だの、其様な物は眼中に置きませんから。』

『はア、』と云つて久く置いて、『それでは、何を標準にお取りになつて其様な……、何ですか、好んで危険な道をお辿りに成る様に思はれますが……?』

『危険な道? 左様、危険かも知れませんが……、』と政男は苦笑して、『けれども關はんです、最う然う決めただんですから、他くまでも行ります。』

『それは、貴方も一人なら關はないでせうけれど、』と多賀子は何處か笑を作つて、『藤子様と云ふ方も坐らつしやるぢやありませんか?』

『彼女は、私が居なくても困りませんが、然るべき人に監督を托して行きますから……。財産だつて、二人で費ふよりは、彼女に與つた方が彼女の利益ですからな。』

『財産を藤子様に……?』

『いや、』と政男はさつと顔を染めて、『財産なんて何にも有りませんが……。私が居らん上に金も無かつたら、彼女だつて心細いでせうから、在る物は悉く置いて行きます。』

『はア……。』と多賀子は解せぬ顔をして、『それでは、貴方の、彼地へ行らしつてからの學資や何かは?』

『確としたのではありませんが、彼地へ行つてから、労働でもして作らへます。』

『まア、労働なさるんですつて?』

『然うです、仲るか反るか、素裸で行つて見ます、豈夫、中途に斃れもしますまい!』と話の中に我と我が拳を固めた。

(五)

侯爵夫人と田舎代議士の息子、多賀子は其の身分の相違を誇つて居るのか? 交際熟れた眼には、一書生たるに過ぎぬ政男など、餘りに手容易く見ゆるのか? それとも、頑悪者であつた幼友達の昔を想出して、此の成長くなつた、眼鏡など掛けた嚴格らしい態が可笑

いのか？ または一つ年少の、世情知らぬ青年は、良人を持つて爰に八年にもなる夫人からは、何うしても小供の如に感はれるのか？ 政男を前に置いての多賀子は、始終莞爾に、始終態を爲て、眼を動かすにも、茶を喫むにも、其の美しい處、其の氣高い處を示せる爲にする如て、何處か沈着しても見え、また餘裕のある態にも見えた。ところが、財産をば藤子に與るとの一言、續いて勞働、素裸……と聞くに伴れて、多賀子の顔には交際的ならぬ、眞の驚愕の色が躍つ來てた。

『まア、其様な御決心で……？』と息を咽んだが、『ぢや、友人の方々も、悉な然う云ふ御覺悟なんでしょうか？』

『然うです。悉な身體一つて行くんです。』と政男は勇ましく面を揮起して、『成功すれば、三人一緒に成功させよう、失敗すりや三人重なり合つて米國の土に化れるのです……！ これも縁でせう、竹盛も林も、知らない地方から出て來た學生ですが、私の爲に一生の方針を過つて了ふし、私も、復れば復られる學校を棄て、彼等と運命を共にするなんて……互に、夢にも見ない事ですからなア！』

『貴方がたは、實に情誼に厚いんですわねえ！』と多賀子は溜息を吐いた。『失禮ながら、私も感じ入りました！』

『情誼に厚いッて事もありません。』と政男は自ら嘲る如に、『情誼に厚い者なら、他の忠告に背いて、一人の妹を残して、無理に外國へ行くなんて事は出来る筈はありませんが……詰り、我儘なんでしょう。』

『い、え、我儘なんて事は少しもございせん……。』と多賀子は頭を掉つたが、久く考へて、『貴方の御意中は熟く解りました。及ばずながら、藤子様は私がお世話申しますから、後の事は一切御心配なく、御計畫通り彼地へ行らッしやいませ！』

『えッ？ 藤を……？』
驚く政男に、多賀子は感慨の燃ゆる顔色を點頭さ、

『然うです！ 私の如な者でも、お力に成らない事もありますまいから。』と聲も明晰と云つた。

『ぢや、藤を監督して下さるんですか？』

「甚だ差出たお話ですか、お任せ下されば何處までも……。」

「貴女に願へれば、藤にも私にも、此様な幸福はありません。失禮ですが、それではお任せしますから、何分何卒！」と政男は頭を垂げた。

「宜うございます、私か身に代へて御引受しますから。」と細い腮を快く動かして、「後の事は御心配なく、専心に貴方の御事業を爲すつて下さい。此う云ふ立派な御精神ですもの、何様な大御業でも、もう御成功に決つてますから。」

「難有う！ 私も誓つて成功します！」と政男も勇ましく云ひ放つた。「必ず成功してお目に掛けます！」

二人は燃ゆる如き眼をして久く凝と顔を見合つた。

「失禮ですが、」と多賀子から云ひ出した。「何ぞ他にも、私て出来る様な事がございますなら、御遠慮なく仰有つて下さいませ！」

「いや、何も在りません。」と頭を掉つた。「私が氣に成る事と云へば、世の中で彼女ばかりです……。随分不幸な奴です、何卒、貴女から宜しく！」

「承知しました。熱く、お解りに成る様にお話します……。」と云つたが、考へる眼をして、

「ですけれど、藤子様は何様なに驚くでせうよ！」

「は、何で？」

「お止め申す筈の私が、反つてお勸め爲るなんて……。」と笑顔に成つた。

「然うでしたか……。」

ところへ、若い侍女が銀の盆に來訪者の名刺を載せて、恭やしく夫人の前に進んで、御面會を願ひ度いからと、玄關に待つて居る由を申上げる。多賀子は名刺に頭を傾げたが、

「應接室へお通し申して。」と命じて遣る。

「では、私は失禮しますから……。」政男は急に椅子から起つた。

「然うですか、」と多賀子も立上つて、「私こそ種々失禮を……。貴方は、これから直ぐお歸りに成りますか？」

「は、歸ります。」

「藤子様をお待ちに成らずに……。」

「何時降りるかわかりませんから……。」と云つて、また更めて挨拶して二階を降りて行つた。多賀子は椅子を離れたのみ、反身に成つて政男の後姿を見送つたが、其の足音の梯子を降りた時に、再も腰を卸して、美しい眼を凝然と朧近き紫銅の茶托に据ゑた。

「夫人、御召更遊ばしますか？」と侍女のお鈴が、何時か傍に控へて居るのである。

「いゝえ。」とのみ、微に頭が動く。

「では、お顔を粧しになりますか？」

多賀子は再、

「いゝえ。」と云つたが、恍然と顔を上げて、其の思ひ沈んだ眼を瞬きもせず、凝然と額の廣い侍女を視詰めた。

侍女は夫人の様子を訝りながらも、

「では、其の儘で御面會遊ばしますか？」

「鈴」と急に思出した如に、「新庄様は最うお歸りなすつて？」

「は、」と侍女は眼を圓くしたが、「如何でございますか。」

「一寸と呼んでお呉れ！」

「は、」

侍女が急いで降りて行くと、何うしたか多賀子も氣の落着かぬ態で、直に縁側を廻つて、梯子の口まで歩を運んだ。と、待つ間も無く其人らしき足音がして、頓て撫肩の、襟脚の白い政男が、真黒な、濃い、針の様な毛を五分刈の頭で、上から多賀子の見下して居るとは氣も着かず、勇ましく梯子を昇つて來た。

「最うお歸りに成つたかと思ひましたが。」と聲を掛けると、

「やア。」と政男は思掛けねば吃驚して、多賀子の前に突兀立止つた。

「あの、他でもございませませんが、今の事を、最う順子様にも話しになりまして？」

「今の事を……？」と多賀子を見て、「いや、何にも話しません。」

「伯母にも？」

「は。何故ですか？」

「一寸と都合がありまして……。あの、先刻、私の申上げた事は、私から皆様に話し為

ますから、それ迄貴方、黙つて下さいませんか！」

「は、」と解せぬ顔をしたが、直ぐ、「はア。」と點頭く。

「孰れ、私から御通知致しますから、それ迄何卒！」

「承知しました。」

「それから、お郷里に行らッしやるのは、何日頃です？」

「明日行くつもりです。」

「明日？ お急ぎになるんですか？」と瞬さしながら政男を見て、「明日一日、待つて戴け

ますまいか？」

「左様、何故です？ 待つても可いんですが。」

「まだ、伺ひ度の事もありませんし……、申上げる事もあるし……、出来るならば。」

「宜うございます、延しませう。」

「ちや何卒！ 孰れ御通知申しますから。」

「は、承知しました。」

其處へお鈴が徐に梯子を昇つて來た。二人の談もこれだけで、

「何も失禮いたしました。」

「や、失禮。」

第七 母の家

(一)

閃めくりボン、浪打つ袖、兩側の櫻の青葉に、午に近き日光も涼しき女子大學の校門を、七八十人の學生が、笑つたり、饒舌つたり、意味も無く叫んだり、はた〜と手を拍いたりして、裾長さ袴を蹴上げて、賑かに、美しく、ぞろ〜、わや〜と出て來た。その軽い、罅裂けた様な聲、莞爾と明るい、春の旭の様な顔を見ても解るが、此の一组は、今しも長い間の苦勞であつた學年試験を終つて、及第、落第、點數の多少、それは各自の胸中に塞がれども、兎も角も新しい空氣に觸れるが嬉しく、暑くとも晴れたる空も嬉しく、

「落第よー」

「満點だわー」

「貴女は何日歸省なさるの？ 一日遊びませうよ。」

「だつて、私明日出立してよ。」

「さア、行李勿忙ねえー ぢや待つてらッしやるの、婚約者が？」と笑ふ。

「貴女も避暑ね、何處？ 函根？」

「心理學も怪しいんですもの、私、行けば淺間よ。而して、噴火口へ投身でもするわ。」

「熱いのに厭だわ、華嚴の方が氣が利いてよ。」

「憤死なんぞ愚だわ、私なら、社會黨にでも成つてよ。」

「それよりは金米糖でも嚙つて、ハンモックのお船でも漕ぐわ。」と笑ひ出した。

「ハンモックなら羨ましいわ、私なんぞ煩悶苦惱よ。」

「ちよいと、安眠國王ぢや無くツて？」

「落第女王よ。」と一人は負けずに洒落續けたが、「女王て云や、新庄様は彼様なはずん〜行くよ。新庄様、なんぼ満點だつて、然うずん〜行くもんぢや無いことよ。」

「だけれども、餘程衰弱してねえ。流石に花の顔も、試験の雨に色ぞ消えけるだねえ。」

「新庄様、お耳は？ 聞え無いことよ。」

その中から、明石縮を着た、崩れ掛つたマガレットを焦茶色リボンで結んだ一女が、砂で白く成つた靴を急いで、

「新庄様、貴女轉居なすつたツてねえ？」と傍に寄るや否や、「何處なの？」

藤子は白絹綴の洋傘を傾げて、

「高輪よ……。貴女には未だ進げなかつたわねえ。」と云ひながら、手製の名刺を渡すと、

「オア遠いー。でも遊びに行くわ、可いでせう？」

「え、宜くツてよ。だけれども、來週に成ると歸朝する人があるの、然うすると、私また

何處か行くも知れないから、來らッしやるなら今の中よ。」

「歸朝て何國から？ 貴女の何か？」

「西班牙からよ。」

「西班牙？ ぢや留學した方ぢや無いわね？」

「外交官よ。」

「デプロマチスト、デプロマチストつて……、何てしたツけ？」と考へながら、「考古學者

地震學者……

「厭だよ……。」と藤子は笑はんとしたが、隅と右手の空地の、榎か何樹か、太い樹陰を見るときも眼を向けると「あらー」と吃驚起つた。

「姉様ー」と呼びながら、藤子の同伴に氣を置く眼をして、傍へ駆け寄つたのは僞儼の男

「小市ー。まア何うして？」

「先刻から待つてたよ。」

汚れたれど白絹の筒袖の單物に、細い腰を白メリンスの帯、帽子も日外藤子の購うて與つたのを冠つて居るが、裾を外るゝ瘠せた脚は、砂塵に黒く染つて、穿いた板草履の板が脱れかゝつてゐる。

「何うしたの？」と藤子は腰を屈めて、懐かし氣に汗臭さ顔を覗き、「何しに來たの？」

「あのね、あの……。」とのみて小市は其の大きな眼を固くして、姉と連立つ女學生等の顔を、只だぢろく〜と眺廻はすのである。

「え、何……？」と問いたが、初めて其事と気が着き、學友等には軽く挨拶を點頭き交はして、前途は分らぬながら、兎も角も牛垣淋しき小路に曲り、「此様な汗を發いて……」

「いだらう……、能く一人で来たねえ！」
其の洗ひ立ての、香水の染みた手巾で顔を拭いて遣ると、垢やら汗やらで黒く成つたが、それを裏返して、藤子も我が頬の邊を押した。

「姉様、お前、此頃は些とも来て呉れなかつたねえ。」

「だつて、姉様は試験で忙がしかつたんだもの。」と杖に摺まる異父弟の手を握つて、「過日阿母様に然う云つて進げただけけれど、お前聞かなかつたの？」

「だつて阿母ア、鹽梅が悪くつてるんだもの……。」

「えッー 何日から？ 臥て居るの？」

「あの、爺の居る中は起きてるけれど、爺が出て行きや直ぐ臥つ了うんだ。」

「何故なの？」

「だつて、爺に秘してるんだもの……。あの、爺が働いてるのに、鹽梅が悪くつてるのは、

あの、辛えッて……。お飯なんぞ食は無えて、水ばかり飲んでらア。」

「まアー 餘程悪いの？ お醫師に掛つてるの？」

「うん、家には、其様な錢は無えもの……。」

と云ふ時しも、彼方から人が通り掛つたので、藤子は急歩に弟の手を曳き、直ぐまた立止つて、

「ぢや、醫師に掛らなさや、鷄も飲まないんだね？」

「鷄は飲まねえけれど、金公の阿母の世話で、お加持して貰つてらア。」

「其様な馬鹿な……。」と藤子は溜息して、「最う餘程に成るの？」

「頭が痛え痛えッて、餘程前からふら／＼爲て居たんだ。だけれど、臥たのは此の頃だ、而して己等に、悲い事はッかり云ふよ……。」と云つたが、何を想出してか小市の眼が潤んだ。

「悲いッて何様な事を云ふの？」

「種々な事を云ふんだよ……。」と口を閉ぢたが、「姉様、此れから、己等の家へ来て呉んね

えか！ 後生だからよー」
 「行くとも、此う遣つて今行くんぢや無いかね……。』と弟の手を振動かし、「ぢや、阿母様が、姉様を呼んで出つて云つたの？」
 「うん、其様な事を云ふもんか。阿母ア、臥りや夢中に成つて了つてらア。」
 「夢中に……？ 其様なに悪いの？」とまた足を立止まる。
 「うん、餘程悪えんだよ、だから、俺ら一人て……、俺ら一人て……。』と小市は遂々聲を震はして泣出した。

(二)

露地の入口に形ばかりの木戸があつて、此處に住む者の姓名は、不揃な木札に、思ひ思ひの書體で懸けてあるが、中でも古參の久松菊太郎の五文字は、雨風に墨色も消えて、木目のみが縞に立つて居る。
 ぢり／＼と日盛り、棄水も便所も臭盛りであるのに、色の褪めた襦袢、繼の當つた股引、

尻の脱けた浴衣、綿の食出した蒲團、襪襪など云ふ物が、勸工場の賣出か、凱旋祭の國旗の如に、縦に、横に、露地の空を塞いで掛渡してあつて、中には未だ濡れてゐる洗濯物から、傘が襟首にも落ちかねぬのである。
 長屋は三棟も續いたが、前の二棟は平屋、奥の一棟は古いながらも二階建て、猫の額程でも臺所が附いて、陥道が減つても兎に角格子戸も填つて、鉢物を窓口に列べた家もあれば、金魚鉢を擔頭に釣した家もあるのだ。
 「何うてい、正氣に成つたかい？」と華美な浴衣に、絹縮の三尺帯を尻に結んだ、仕事師とも、遊人とも附かね若者が、其の二軒目の臺所から家内を覗込んで、「矢鱈と水ばかり飲ましちや可けめい、何なら、氷でも買つて來やうか？」
 而ると、建具を取脱した家の内、梯子の見える壁際に座つて、臥て居る病人に水を飲らうとした小肥の中婆さんが、
 「然うだねえ、だけれども、餘まり冷たい物は可けなからうよ……。』と臺所に答へて、病人には聲を高く、「お綱さんや、お前さん、氣を確り持なさや可けませんよ、此れん計りの

事に何だね……行者様は、直ぐ癒く成るッて仰れつたりや無いかね！」

「何ッたッて、三日も四日も飯を食は無えんぢやア……。」と臺所からは首を伸して話を合はせる。「旨え物でも買つて、食はせる算段して見ねえな。」

「然うよ、一粒でも食べりや力が附くんだけれど……。」え、何だッて、食へ度か無い？ それが可け無いんだよ。無理に食つてごらん、口に適つた物なら、喉へ通らないッて事が無いから……。本當に、馬鹿に氣が弱いよ。」

「此様なに悪いのに、氣が附が無えて居るなんて、菊様も暢氣が過ぎらア！ 阿母ア、鳥渡呼んで來やうか？」

と云ふと、其聲を聞いた病人は、突伏したまゝて急に其の瘠せた手を振つて、

「止して下さいよ、止して下さいよ、最う起るんてすから……。」

「可つて事さ、私が承知て居るよ。」と枕頭に居る婆さんは鎮めた。「呼んなんて遣るもんかね、凝として臥んで居てよ……。」

「菊様に秘して機つてんだな？ 其奴ア無理だ、盲人ぢやあめいし、何時まで……。」と

云ふ時、偶と足音に露地を返返つて、「や、漸と歸つて來た。小市坊、何處へ行つてやがッた……。先刻から、二回も探しに行つたぜ……。あッ、阿嬢様も……。」

後れて小市の後から、メリンスの單物にカシミヤの袴の、美しい藤子の急いで入つて來るのを見ると、急に襟を合はせて、不器用なお叩頭をするのであつた。

(三)

名告り合つた事は無けれど、此家を訪ぬる度毎、露路でも會ひ、家でも顔を見たことがあつて、隣家に住む小市が友達、其の金公とやらの兄で、確か公園の觀物か、芝居かの道具方と云ふ話も耳に在るので、藤子も會釋はしたが言葉は掛けず、ついと小市の後から格子の中に入つた。

狭いけれど履物を脱ぐだけの土間、破れたれど障子も填つて居るが、上れば八疊一室限りの、簞笥もあれば長火鉢、汚れた浴衣も掛れば、帝釋天の軸物も掛つた、取散した片隅の、凸凹の硝子鏡を額の如に釣つた壁際に、綿の固い蒲團を斜に敷いて、母のち綱が昏々と眠

つて居る。

「まア、阿嬢様、好い處へ来て下さったねえ。」と枕頭に居た隣の婆様は、我が家へ来た客にても挨拶する様に云つたが、「好い所だ」と、「と鉄漿を塗つた歯を剝出して我と我が言を笑ひ、」然う云つちや濟まないけれど、本當に、貴女の来て下さったのは神業でさア！見て下さい、此の通りですよ。お綱さんや、お綱さんや、阿嬢様がお来てなすったよ！」藤子は只だ、

「何うも、種々お世話に成つてねえ。」と言を掛けたのみで、婆様には構はず熱臭い枕頭に寄り、「阿母様ー 阿母様ー」

「阿母や、」と小市も呼んだ、「姉様が出来たよ……、阿母でば。」

「静にお爲よ、」と藤子は小市を制して、「阿母様、阿母様……。眠つてゐるんでせうか？」

「いゝえ、」と婆さんは黒油の頭を掉つて、「何日も一時は此うなんてすけれどね、就中も今日は可いねですよ。お綱さんや、お綱さんや、何うしたんだよ、氣を確り持ちなよ、阿嬢様が御心配なさるぢや無いかね。本當に、此様な立派な阿嬢様が在るのに、何を感々す

るんだよ……。氣を大きく持つてなよ……。」

藤子は徐と母の脈を數へて居たが、

「まア大變！」と悸として、眼を固くして婆様を顧みると、

「何う爲たんですえ？」と顔を寄せて急に低聲に成る。

「此邊で、良い醫師は何處でせう？」

「お醫師？ 然うですわねえ……。お醫師つて云つてもねえ貴女、勿々、金を示せなさやねえ、」と云つたが、「貴女の前だけれどもよ。」

「金なんぞ惜つて居られ無いわ。誰でも可いから、大學出の人を呼んで下さいな、此邊で一番に技倆の良い人を。」

「貴女がお呼びなさるんなら、夫ア何様な先生だつて、喜んで來ませアね、」と婆さんは現金に勇んで、「左様さねえ、誰が可いてせうねえ……。」

婆様は考へて、彼か此かと名を擧げた中に、淺草病院と云ふのと、藤子も夫が宜しからんと談を決めて、迎の使をば、

「ぢや、他人つて云は無いで、拙者の件を遣りませうよ。」と婆さんは匆々に出て行く。而ると小市は、

「姉様、お醫師なんぞ招だつて錢は無えよ、姉様持つてるのかい？」

「小兒は其様な事を云ふもんぢやありません。」

「だつて、爺が歸つたつて錢持つて来やし無えよ……。」

「頼い、まア彼方へ行つても坐で。」と叱つたが、當惑なるは我が懐中にも金の無い事である。

小市が其處を動けば、階子の口から落来る二階の光線は、右枕に臥たお綱の顔を明るくした。熱を吐く皮膚の色は、しつとりと汗に光澤を放つて、薄く紅味を帯びて居る。瘦せた顔は鼻の高いのばかり目立つて、美人たりし昔の面影も、只だ淋しく、只だ淺間しく見えるのみである。

何を夢見るのか、時々その乾いた唇を動かしたり、凹んだ眼を半ば開いたり、投げ出した手を舉げて、空気を掻く様な態をしたが、急に胸に被けて居る綿入を剝いて、其の脚の下

に踏敷いたのである。

「あれ、阿母様……。」と藤子は慌て、また其物を被けて遣らうとすると、

「あ、熱い熱い」とお綱は眼を閉ふつた儘、綿入を掻退けながら、「金様の小母様、冷水を一杯下さいな。」

「阿母様、私ですよ。」と顔を寄せて、「私ですよ。」

其處に立つて居た小市も、

「阿母ア、姉様が来たんだよ、確りして呉んなよ。」と顔を覗いて呼んだ。

「え？ え？ 何に？」と眼を開く。

「私ですよ、藤ですよ……。」

「藤子様だね、好く来て呉れたねえ、此様なに暑いのに。速く身体でも拭きよ。瀉車は嘔ど込てたららねえ……。」

「何云つて居らッしやるのよ、私、瀉車でなんぞ来やしなわ、確りして頂戴よ。」

「阿母ア癡惚けてらア、」と小市は笑つて、「瀉車なんぞあるもんか、腕車で来たんだよ、

ねえ。」

「小市坊も同伴に來たのかい、宜かつたねえ。今も政男様に會つたらね、私の事なんぞ、些とも悪か思つて居ないんだとさ、彼の人だもの、小市坊に資本でも投して、大商人にても爲る氣だらうよ。店を開きや、是非とも仕着を出さなや成らないんだけど、三十枚拵らへると、随分と錢が要るねえ……。」

「阿母様、夢でも見たんですか？ 阿母様、確りして居らっしゃいよ。」

「網は眼を大きくして、凝然と然ら云ふ藤子を見たが、また、

「藤子様だね？」

「私ですよ。これからはね、これから私が看護しますからね、何にも心配する事は無いんですよ、ね、ね阿母様……。」

「藤子様が……、此處に居て呉れるの？ だけれど、兄様に叱られるでせう？」

「其様な事を心配なさらないでも宜うござんすよ、叱られ様が何う爲やうが、私、阿母様の癒くなる迄は此處に居ますわ。」



而ると小市が傍から、

「姉様、本當に居て呉れるの？　ぢや、家の人に成つて呉れるのかい？」

「お前さま、彼方へ行つてお居てよ、」と藤子は小市を退けて、「ねえ阿母様、解つたでせう？　今醫師も来ますからね、氣を靜にして居らっしゃいよ、藥を飲れば直ぐ癒くなるんだから……。」

「いゝえ、不意な事だよ、私は何處も何とも無いんだよ、只だね、少し頭が重かつたんで、一寸と横に成つたばかりなんだよ。どれ、起きませう、最う菊様も歸るんだらうから……。」と云ひ様、むくり蒲團の上に取りかたので、

「まア阿母様、」と藤子は母の肩に手を掛けて、「何ですよ、臥てなきや可けませんよ……。」力を入れると、母は直ぐまた横に倒れて、また昏々と眠るのである。

即て呼びに遣つた醫師も来て、隣家の親子も其處に列んで、長い診察が済むと網の病氣は窒扶斯と云ふことに決まつた。

第八 外 泊

(一)

收つたかと思へば降る、降るかと思へば忽ち收つて、空模様は朝から間断なしに變る。濕つた重い風が、厭々に吹込む、器物でも曇ても、霧を吹被けた如にじとくする、と云つて窓を閉めれば、蒸さるゝばかり暑苦しいのである。

主人の呈八郎は健麻賀斯が痛出したので、醫師を呼ぶやら按摩を呼ぶやら、産婦は産婦で頭が重いと来て、今朝から室の外に顔も出さぬ。起きて働く者も、戸外を眺めては顔を顰めて、厭な天気だ、厭な天気だと云ひ交はす。その中に強い日光がばつと射す、おや、晴れたのかと見れば、何時かまたじとく小雨が降つて居る。その中に、やア虹が立つた！と何所からか元氣の好い小兒等の聲がする……。

「ちゝ虹！ 順子様御覽なさい、奇麗なこと！」と其處の窓から顔を出した多賀子は、俯

外

泊

(147)

向いて坐つて居る順子を振り返つたが、また、「順子様、貴女の様に一時に心配したつて、空しく頭を苦しめる計りですわ……。黙つて居れば宜かつたねえ！」

「だって、多賀子様、」と順子は面を起して「私、心配でなりませんもの。今迄、此様な事が無いんですから。」

「今迄つて、同居に成つたのは遂に此頃ぢやありませんか……。』と多賀子は我が襟に戻つて、「最う鈴が歸るから、然うすりや悉な分るけれど、私、此様なにも考へたんですよ……、若しや、新庄様が病氣にでも成つたんぢや無いかと。」

「然うでせうか？ それで、泊つて看病して居るんでせうか？」と吃驚した様に多賀子を見上げたが、「それにしても怪しいわ、通知する事を忘れる様な方ぢやありませんもの……、ちやア、藤子様が何らか爲たんぢや無いんでせうか？」

「病氣にですか？」

「え。過日から、彼様なに、遅くまで勉強して坐らしたんですもの……。試験が済んだんで、急に氣が緩んで……。」

「然う云へば、昨日の朝、大變顔色が悪いとは思つたけれど……、元氣は不斷の通りでしたから、別に問ねも爲なかつたが……。」

「如彼いふ氣性ですもの、少し位の事は押し居らッしやるんだから……。實は、二三日前から、食物も減じて居たんですの……。」

「ぢやア然うでせうか？」と多賀子は頭を捻つたが、「だけれど、政男様なら尙更、通知しない筈は無からうと思ふけれど……。鈴はまた、何を爲て居るんだらう？」

「多賀子様、私一寸と行つて見て來ませうか、心配で耐りませんから！」

「最う少しお待ちなさいよ。伯母様に知れても悪いから。」

「母には秘密で……。」

と云ふ處に、丁度其の使に出した侍女のお鈴が登つて來た。

(11)

このお鈴と云ふ侍女は、其の昔、神柳家の主人も御殿様と呼ばれた時分に、家來であつた

者の娘である。今迄に二回も縁付いたが、何うした運か、二回ともに夫に死別れて、子と云ふ物も無き淋しい寡暮しを爲て來たが、多賀子が侯爵家へ興入の際、自分から願つてお附添の侍女、棄つた一生と云つても、其の頃は辛と三十に成つた計りの身ながら、外見も生命も此の美しき主人に捧げて、八年を一日の如く御奉公し續けて居るのである。丈も低い方で無けれど、小肥りの、頬は圓く、額の肉厚く、自分では肥満女と云ふ事に決めては居れど、全體が色白の、眉の痕目立つて青さに、伊勢崎の紺紵の單物、茶博多の帯をお太鼓に結んで、敷居の外に、其の丸鬘の頭を恭やしく垂げ、

「只今。遅はりました、睡をお待ちかねて坐らッしやいましたらう……。」

「御苦勞！」と多賀子は遙に點頭さ、「大變手間取つたねえ。如何だッたい？」

「はい。」と矢張り其處に手を突いた儘で、「直ぐ、新庄様の御下宿に伺ひましたら、生憎お不在でございました、けれども、藤子様は、お泊りにも成らず、お見えにも成らなかつた状でございます、それたけを聞きまして……。」

「マア」と順子の顔色が變つた。

「如何したんだらう？」と多賀子も眼を睨る。
 「それから、仰の通り、直ぐ學校へ参りまして、昨日、お下りの時間を伺ひまして、夫から、同級の方のお姓名と宿所を伺ひまして……。」とお鈴は談を續けた。
 多賀子は然うでもなければ、順子は何時かお鈴に膝を向けて、其の談と與に顔色までも變るのである。お鈴の云ふには、夫から學校を出て、知らぬ家へ不躰の如なれど、教へられた其の同級生の中でも、手近なるを探して訪ねて行けば、生憎と其家の娘は外出中で用は辨せず……。

「大變骨が折れたねえ。」と多賀子は侍女の談を遮り、「而して、何うにか此うにか分つたの……。」

「はい、確とした事は分りませんが……。」とお鈴は我が胸に順序を決めて來た報告の半に、主人に不意な言葉を挿まれたので狼狽くと、

「ぢやア、何處へ行つたか分らないでせうか？」と順子は潤んだ眼を多賀子に向ける。

「それで、何てございますか？」とお鈴は追付く様に云つた。「最う一人の方をお訪ね致しや

して、その方に伺ひましたら、學校のお歸りを、途中で待受けて居たらしい小兒がござりました、其者と同伴に、何處へだか行らした状でございます……。」

「小兒？ 男か女か、何者？」

「あの、穢ない男の子で……、何てございますか、健人だとか申されました……。」

「まア、何者でせう？」と順子は呆れる。

多賀子は頭を捻つたが、

「其様な者が待つて居つて……？ それから先は分らないだねえ？」

「は……。」

「その小兒は、何様な者だか、お分りには成らなくッて？」と順子も聞く。

「はい、けれども、大層お親い問柄の様にも見受け申したと云ふ話でございました。而して、他の方の話に、その小兒が確か、姉様と呼んだとか云ふこととござりました。」

「姉様？」

「姉様？」

二女は顔を見合はした。
暫し三人の言葉絶ゆれば、何樹の花か、睡氣の兆す様な花の香が、濕つた風に伴れて窓から入つて来る。壁際の紫檀の書棚では、置時計の飾人形が、かっちん／＼と徐に揺いて居る。

多賀子は其の涼しい眼を睨たいて居たが、

「怪しいわねえ、」と莞爾して、「何事かの間違ひだらうよ……。」

「然うてすねえ、」と順子は心配の顔色を續けて、「其様な者に姉様だなんて……。何うなす

ツたんでせうねえ？」

「學友の同胞でいもあるだらうか？」侍女を見遣り、「穢ない男の見だつて？」

「はい、確に然う云ふも話でございしました。」

「新庄様に問いたら分るだらうけれど……。何處へ行つたの、新庄様は？ 何とか、下宿

へ云ひ置いて来たの？」

「はい。急にも目に掛り度い事が出来ましたから、直ぐ此方へも来て下さいませう様にッ

て……。」

「多賀子様、」と順子は氣が着いた様に、「若しや、豊崎様から呼びに遣したんぢや無いてせ

うか？」

「豊崎夫人がですか……？」と多賀子が笑ふと、

「でも、然うだらうと思ひますわ、」と體裁悪げに、「而して、あの政男様を……。」

「藤子様に呼ばせたくてですか……？」 豈夫。と云つたが、其處に聴いて居る侍女に、「何う

も御苦勞、階下へ行つても息み。而してね、後刻で着更へさしても呉れな、汗に成つたか

ら。」

侍女が畏まツて出て行くと、多賀子は直ぐ、

「順子様も……。』と笑つた眼に睨めて、「なんぼ豊崎夫人だツて、其様な計略をするもんで

すか！」

順子は赧くなり、

「然うてせうねえ……。ですけれど、他に泊る様な處があるてせうか？」

「然う……、其の個體と云ふのは解らなねえ……。」
と云ふ處に、御着更の結城紬の縞紵の單物、紺縮緬の長襦袢、水淺黄の縞博多の帶、禪か
ら肌襦袢、帶留の果までを、金時繪の巾箱に恭やしく捧げて、今降りて行つたばかりのお
鈴がまた入つて來た。

「今でもない可いの……。」と多賀子は身を起して、「順子様、一寸と失禮よ。」

「お背中をお拭きに成りませんか……。」

「それ程でも無しの……。」

「お鈴はん……。」と次の室から不意に顔を出したのは小梅である。「貴女、一寸と」

「おや、」と振り返つたが、「少しお待ちなさいよ。何です。」

「あの……、新庄様がお來てやして……。」

「何、新庄様が來らしつた？」と多賀子は速くも聞谷めて、「政男様？ 藤子様？」

三人の眼は悉な小梅に走つた。

「はい、阿兄様の。」

「あら、政男様が？」と順子は起つて行き、「何處に居らっしゃるの。」

「階下で、貴女の阿母様と、お話して居てです。」

「順子様、速く行らっしゃいよ、」と多賀子は氣を急いで、「伯母様が、藤子様の事を聞くと
可けないから……。」

「あ、然う……。」と順子は慌て、二階を下りた。

(三)

洋行準備の第一着手に、大急ぎで故郷へ歸る筈の政男は、是と指して用事も無さに、今日
まで五日の間を、漫然と東京で過したが、不在の下宿へ侍女が来て、夫人からの言を云ひ
置いて去つたと聞くと、慌てた様に急に下宿を駈出したのである。

今一回會ひ度い、それ迄は歸省を延して呉れ、と頼んだ多賀子は、急ぐ政男の足を今日まで
繋いで居たのだ。其の二階で別れる時の様子では、明る日あたりは、來いとか、行くと
か、て無くも何とか通知が有らうと、政男は其事が氣懸りて、終日物も手に着かなかつた

が、夜に成つて美しい繪端書が着いた。來客があつて今日は約束を履む機會を得ぬ、御宿を願ふ、と云ふ意味を短かく認めたのみで、明日は何うとも無ければ、歸省を迫延しにして呉れとも無いのだ。

要領を得ない端書だ、急ぐ者を留めて置きながら無責任な談だ、と政男は解し難る多賀子の意を、憤つたり、訝つたり、床しく思つたりして、其の夜は眠る事も出来なかつた。その翌日も、端書を眺めては頭を捻つたが、彼程熱心に約束をした物が、豈夫に此儘流して丁ふ筈も無い、今日は何とか様子が有らう、と云ふ事に決めて、散歩にも出ず、只管その様子の來るのを待つたが、何事も無く長い日は暮れて了つた。

最う構ふ事は無い、明朝は一番列車で立たう！ 政男は其の夜は早く寝た、而して幾回か唇を咬んだり、幾回か拳を固めたりしたが、翌朝起出ると、多賀子からの來簡が机に載つて居る。

手跡は端書よりも一段美しく見えた。矢張り違約を詫て、尙ほ待つて呉れとは頼まれぬ儀ながら、出來るものなら、今一回熱談の後にして貰ひ度い、との意味であるが、其の違約

の罪を謝する文字の中に、「勝手がましく、申すも耻かしけれど、恐なる我が心の中は、底の底まで知り盡し給ふ幼な友達の御許様なればと、御親みの厚さを頼みにして、此くは……」と筆を走らした所もある。政男は幾回も幾回も此の書簡を讀返したが、熱談の後と計りて、それが何日とも書いて無く、其の機會は先方から通知するのか、通知なくも來いと云ふのか、捉まへ所なき文言に迷つて了つた。けれども、兎に角歸省は延す事になつた、而して、早速神柳邸へ行つて、多賀子に會つて見やう、と此う決めた、會つて談をして、それ時間間合に合つたら郷里へ立たう。

然うは決めたものゝ、偶とまた、孰れ通知する迄、との別れる時の言葉を想出して、今突然に行つたら、先方の都合が悪いのか知れぬとも考へた。それに又、多賀子に會ひ度い、に呼びもせぬに來たと思はるゝも耻かしい。矢張り通知の有る迄待たうか？ 手紙で問合はさうか？ いや、明日は試験が終つて、藤子が此處へ寄る筈である、兎に角彼女に様子を問かう、行くとも、待つとも、其の様子を聞いた後に爲やう！

それで政男は、只管藤子の立寄るのを待つたが、今度は妹までが約束を背いたので、今

朝は呼出の端書を出した程である。然るに意外にも、我を招く多賀子の使者が来たと聞いて、最う胸を轟かし、取る物も取敢ず高輪へと駆付けられたのである。

(四)

門を潜るも夢心地で、毎度の様に中の口から上つたが、忙がし状に通掛る日比野の未亡人と、ばったり縁側で逢つた。

「おや、政男様、」と未亡人から聲を掛けた、「藤子様は？」

「え、藤？」と佇立つて、「藤は何うか爲ましたか？」

「同伴ぢや無いんですか？」

「いゝえ、」と敏の刻まれた未亡人の顔を眺めて、「私の下宿へても行つたんですか？」

「おや……」と愕然として、「昨夜、貴方の下宿へ泊つた筈ですが？」

「藤が……？」と驚きと興に顔を紅くし、「いゝえ、泊りません！ 當家へは歸らんですか？」

「何うしたんでせうマア！」と未亡人は色を變へて、「昨日の朝出たッ限りですよ……。順子や、大變だよ……。」

其處へ順子が駆けて来たので、

「來らッしやい、」と政男に腰を屈めたのみで、「何卒、一寸と此方へ！」

「一寸と此方へぢやありません、」と娘を遮つて、「藤子様は、政男様の下宿へ泊らないんだと。お前はまた、何を間違へて居るんだよ、大變な事ぢや無いかね！」

政男は眼を圓くして、

「ぢや、私の所へ泊るッて出たんですか？」

「は。いゝえ。」と順子は周章しながら、「ま、一寸と此方へ。」

「順子や、何です其の、そはく爲た風が……。」と母が窘めても、

「母様には後刻で談ですから……、ま、政男様一寸と……。」と先に立つて、順子は政男を導いた。

二階では多賀子が着更へ中、梯子の傍にも座敷はあれど、紙門を開放して叔父の寢室と續

けば、手近なる玄關脇の應接室、窓掛を首めとして、壁紙も、敷物も、此頃新しく代たばかりの、侯爵家専用の其室へ入つて、椅子に腰を卸すよりも速く、

「何う爲たんです順子様、」と政男は急しく云つた。「藤は何う爲たんです？」

「何う爲たんですか、昨夜は歸らないんですの……。今迄も、此様な事が有つたんでせうか？」

「いや有りません……。無いてせう。僕の下宿へ泊るッて出たんですか？」

「いゝえ、單だ學校へ行らしたんだけれど……。』と順子は更めて顔色を變へた。「貴方にも知らせ無いなんて、何處へ行らしたんでせうねえ？ だけれど、泊る様な家の、お心當は無いてせうか？」

政男は頭を掉つたのみ、眼を据ゑて凝然と思に沈んだ。

「多賀子様も、大變御心配でねえ、今朝、女中を、貴方の下宿から學校へ廻らせましたの……。』と順子は其の女中の報告の大概を語つて、而して、其の待つて居た者は、穢い服装の男の見てしたッて……。』

「男の兒？」

「然！ それも不具者……。僞僞ですッて！」

「僞人？」と政男はびくりとした。

「何か、御心當が有りますか？」と順子は政男の様子を訝つた。

順子の問には答も無く、政男は兩手に我が頭を押へた、而して、其の儘卓子に俯向いて了つた。順子も、久く黙つて居たが、

「政男様、何うか爲すッて……。』と顔を覗いたが、それでも答は無し。

と、俯向いた政男の其の背後、絞揚げた窓簾の間を透して、遙か表門を眞直に駈けて來る腕車が入ると、

「あら、藤子様……。』と叫んで、順子は窓の傍に駈寄つた。

(五)

藤子の初めて會つた者は未亡人で、それから駈出て迎へたのは順子であるが、母娘ともに

無断で外泊した其の事よりも、平常と變つた藤子の様子に呆れて了つた。

昨夜は徹宵野原の中でも駆ずり廻つて、其の儘歸つて來たのではあるまいか？ 頭髮は昨日の廂髪、最う根が脱け、心が食出して、多い毛は襟に崩れ掛り、額にも頬にも亂れて被つて居る。その顔は疲勞に荒されて、艶も失せ、色も蒼さに、凹み掛けた眼のみが、興奮の光を燃やして居るのだ。

「藤子様、貴女はまア……。」と未亡人は、面を見ると行きなり咎めた、「如何なすツたんです？」

「何も、御心配を懸けて……。』とのみて、別段謝罪らうともせず、「兄が來て居りませう？」

順子は顔ばかり眺めて、
「藤子様、何うか爲すツて……？」

けれども夫には只だ頭で會釋して、
「兄は何處に居ます？」と藤子は、一人て椽側を奥の方に進む。

「政男様は應接室よ。だけれど藤子様、」と順子は後から引留める様に、「昨夜は何うなすツ

たの……？ 衆人心配したわー！

「濟まなかつたわねえ！」と顔は振向いたが歩は停めず、「應接室つて、階下の？」

直ぐ其處へ來て、開き掛つた扉から覗くと、政男一人居るのみなので、藤子は躊躇もせず衝と入つて、

「兄様、私ね、」と政男の傍に寄つて、「只今下宿へ行つて、跡を追いつて來たんですよ……。」

政男は眼鏡の顔を嚴然と振起して、
「貴様は昨夜何處へ泊つた？ 無断で外泊して濟むと思ふか！」

「夫は濟みませんけれど、其様な事を願ひて居る場合ぢや無いんですもの……。」と藤子は淀み無く云つた、「兄様、甚だ突然ですけれど、一生の大事が出来ましたから、何卒金を三十四下さいませしー」

「何だ？ 貴様は、誰の許を得て外泊した？ 先づ夫から云へー」

「夫はお話します、何様なにも、兄様の疑念の晴れる様にお話します、だけど、今は赦して下さい、非常に急ぐんですから、」と一つち叩頭して、「濟みませんけれど、何卒金を出し

て下さるしやしー」

「貴様氣が違つたのか？」と身用意を失つた妹の態を睨めて、「勝手な事はかり云やがッて論す事がある、同伴に下宿へ来い！」

「行きますわ。何處へでも行くけれど、金の事は何卒承知して下さいまし！ 大變な事が起つたんですから、ねえ兄様……。」

政男は返辭もせぬ、その顔色は怒氣に燃えた。

「兄様、何卒承知して下さいさね、」と藤子はまた願つた、「それを戴いて、私直く行きたいんですから……。」 此う爲つて居る中も氣遣はれるんですもの……、ねえ兄様……。」

「え、煩い！」と叱つた。

「煩いッて兄様……。」と藤子も嚴然として、「此程事を分けて願ふのに、貴方は背いて下さらないんですか？ 兄様、其様なに金が惜んですか……？」

「まア、藤子様」と先刻から入口に起つて、兄妹の態にはら／＼して居た順子は、急いで藤子の袖を引いて、「兄様に其様な事を仰有るもんぢやありませんわ……。何事に要るんだ

か、費途を辭にお話に成れア可いぢやありませんか。よ、藤子様、然う爲つて無いて、まアと凭けなさいな。」

「順子様、放棄つても置なさい、」と政男は其處に起つた儘身動きもせぬ妹を更に睨めて、

「此奴は狂人ですから……。」

「狂人でも何者でも宜うござんす！ 兄様は、何事にも知らないから其様なに澄まして居るけれど、目下阿母様は大病です……。」

「なに、阿母様……。」

「阿母様ぢやありませんか！ 阿母様ぢやありませんか！ 今になつて何を隠すんです……。」

「……。」と云ふ中に、はら／＼と涙が溢れた、「何が恥かしいんです！ 私は云ひます、誰の前でも云ひます！ 何様な者でも母ぢやありませんか！ 兄様だつて母から生れたんでせう……。」

その母が、壺扶斯に罹つて、今危篤に陥つて居ます！ それを貴方は、知らな顔で濟さす氣ですか……。」

溢るゝ涙と興に、聲も鋭く云ひ續ける妹を、最早耳にも掛けず、對手にも爲ぬ如く、政男

は凝と首を垂れて、見るとは無しに卓上に眼を落して居るが、其の廣き額、高さ鼻、固く結んだ唇までも、次第に色を失ひ行くのである。

「兄様、此程云ふのに、貴方には聞えないんですか？」と藤子は無言の兄に一步近く寄つた。「唯た一人の親が危篤で居るのに、兄様は何とも感じ無いんですか？」

「俺には親は無さ」と只だ一言。

藤子は、其の氷の様な兄の顔を視詰めたが、

「それぢや、兄様は誰から生れましたか？」

「貴様のやうな狂人に、答へる必要が無い。」

「それだつて、貴方は、彼の阿母様から生れたんぢやありませんか？」

「俺には母は無いんだ、貴様の母なら、貴様の勝手にしろ。」

「然うですか？ 然うですか？」と藤子は涙の顔を點頭き、「それでも宜うござんす！ けれども、私には母が在るんですから……その母が大病ですから、何卒、今願つた金を下さ

さす。」

「いや、遣らな。一厘も遣らん。」

「何故ですか？ 私の母が死んでも、兄様は構つて呉れ無いんですか？」

「勿論だ！ 貴様の學資の他は一厘も遣らん！」

「私は學資なんぞ要りません……。」

「何だと……？」

「親の死ぬのを救はなして、學資も學校も要りますか……？」

と叫ぶ藤子と、

「まア、止して頂戴よ……。」と頭へて居た順子が制め様としたが、

「私は、私は……。」と藤子は制める手を振拂つて、「親を見殺にして、自分の榮利を計る様な、其様な穢れた人間ぢやありません……。」

「貴様、俺を罵るのだな……。」聲と與に、政男は突と椅子を起つた。

「政男様、何卒……。」と順子は間を隔てんとしなが、

「假令何様なに成功しても、親に不孝をして何に成ります……。」と屈せぬ藤子。

「えい、生意氣な！」
力ある政男の腕は、順子を選んで妹の肩に飛んだ。藤子の身体はよろ／＼と壁に倒れた。

「あれ！」と叫んだ順子は、夢中で扉の外に駆出した。

廊下へ出ると、丁度梯子の中段に、先刻から立つて居るのか、今降りて来たのか、階下を眺めて多賀子が一人、

「何うしたの、順子様？」と聲を掛ける。

「多賀子様……」と梯子を登つたが、息は續かかず、「何卒、何卒、速く何卒！」

「何うしたの、其様な顔へて……？」と順子の頭へる手を凝と握つて、「まア落着いてー藤子様踏つたッねてえ？」

「え。而したら、政男様が怒つて、藤子様を打つてすもの。何卒止めて……！」

「まア、其様な亂暴な……。」と多賀子は、順子の曳く儘に梯子を駆降りて、直ぐ應接室へと躍込んだ。



(六)

後から飛附いて、其の振上げた腕を押へんとした二女は、政男の力に引摺られたが、中にも多賀子は何うした機勢か、危く椅子の間に踏んであつた。

「あれ、多賀子様……」と順子は夢中で抱止めたが、其の身は反つて床に倒れた。

多賀子なる一聲を聞くと與に、政男はびつくり背後を振り向いて、直ぐ擡んで居る妹の頭髪を放した。藤子は忽ち跳起して、兄の傍を逃げんとしたが、多賀子の姿の目に入ると、これも同じくはつと驚き、壁際に身を竦めて突立つた。機に解けた髪の毛は、ばらりと肩に被つた、折れた櫛、折れた針は床に散つた。兄妹の顔は眞蒼である、制めた二女も眞蒼である。

「多賀子様、何處も痛めに成りませんか？」と順子は起上ると、先づ大切な多賀子の身體を氣遣つた。

「いゝえ……。」と多賀子は聲も身體も顔ひながら、開き掛つた襟を正して、「新庄様、貴方

はまア……、此の始末は何事です？」と息を喘ませて咎め寄つた。
「や、失禮致しました？」と政男は點頭く。
涼しき眼も今日ばかりは威權に輝つて、俯向いた政男の横顔を睨めたのであるが、頓て藤子に歩を轉し、

「藤子様、何處も怪我しませんか？」

「は。恐入りました！」と此女も頭を垂げる。

「まア、衣服も袴も此様なに裂いて了つて……！」と多賀子は、袖の振断れるばかりに裂けたメリンスの單物、横裂のカシミヤの袴に目を着けたが、更に政男を顧みると「新庄様、貴方は、亂暴な方ですわねえ！」

順子は、自分も咎められる一人の様に、憤し氣に俯向いて控へて居たが、此の時徐に藤子の傍に来て、

「本當に何處も痛か無いの？」と小聲に顔を寄せる。

「え、有難う……！」と點頭くと、涙がはらりと溢れた。

「何が原因です……？」と多賀子は政男に尋ねた、「藤子様の昨夜泊つた事ですか？」

政男は口も開かぬ。久くして今回は藤子に、

「藤子様、何て此様な大騒に成つたんです……？」まア、此方へも掛けなさい！新庄様、貴方もも掛けなすつて……！」と多賀子は椅子に近く寄つたが、「何様な御事情ですか、私が伺ひませう！」

政男は其處に突起つた儘で、

「いや、詰らん事です。貴女にお話する様な事ぢやありません。」

「深くも尋ねしちや失禮ですけれど、私も、藤子様をお引請したんですから、成らう事なら話して銀さ度いんですがねえ……！」と兄妹の顔を交る交る見廻して、「では、藤子様、貴女一寸と二階へ來らッしやう！」

「はう。」と點頭くのみ。

「ま、一緒に來らッしやう。」と多賀子は扉近く歩を移す。

「でも、此様な……！」と我が亂れた服裝を恐入ると、

「ぢや、お服だけ更へて行らッしやいな。」と順子が云ふ。
「服装なんぞ關ひませんよ。さ、行きませう……。」と多賀子は強て藤子を促して室を出たが、後を振り返つて、「新庄様、失禮ですが、少し其處に居らッして下さいよ。」

(七)

二階の客室に入ると、多賀子は侍女等をも退けて、我が椅子を近く座らせ、

「さ、藤子様、伺ひませう。」と片腕を卓に載せて、「何事も秘さずにお話しなさい。何だッて、彼様なに兄様が怒つたんです？」

「は……。」と微に答へる藤子は、拭つても拭つても、涙の止まらぬ眼を押へて、只だ頭を垂げるのみである。

「何です、藤子様、泣いてたッて解らないうぢやありませんか？」と久く髪を被つた其顔を覗いて、「孰れ外泊したのが原でせうが……、何だッてまた、無断でお泊りしたらう……？ 私等も、随分心配しましたよ。」

「は、恐入ります！」とまた頭を垂げた。

「貴女だッて、高等教育を受けて居る方だもの、無思慮な事を爲る筈は無いんだから……、外泊なすッたに就いては、其處に夫だけの事情も有らうし、また、立派な辯解も有りてせう……？ けれども藤子様、貴女が辯解を爲たのに、彼様なに兄様は怒りなすッたんですか？」

「悉な、私が悪かッたからでござります……。」

「貴女が悪スッて云ふと……？」 泊つた事がてすか？」

「奥様」と呼掛けて、藤子は急に面を起した、「私には、唯だ一人の母親がござりますの……。」

「え、阿母様？」とは云つたが、顔には驚いた色も無く、「何處に居らッしやるの……？」

「此様な事は、申上げるのもお耻かしらんですけれど……。」と云つて云ひ渡り、「母と云つても、今は他人も同様ですけれど……。」

「はア……。」と多賀子は喉を促す如く、「では、昨夜は、其處へお泊りでしたか？」

「は、實は、その母が病氣でござりました……。」と藤子は幾度か躊躇つたが、終に昨日

學校の歸途に、異父弟なる小市の待つて居た事から、母の病氣、病院に入れて、昨夜は看病をして明した事、兄に入院費用を貰ふ爲に、下宿から常邸まで腕車を囀つた事、兄は母の不貞を憎んで居る事、その兄に無理は無けれど、貧苦の間に重忠に罹つた母の、自分が救はなければ生命も危い事までを談し「今ぢや、私に取つては、父とも母とも、最う兄より大切な人は無いんですから……、私だつて、逆らつて悪いとは知つて居りますけれど、母の憫な態を見ますと、私は、實に生きてる効も無い様に思はれまして……。」

長き談の終るまで言葉も抑さず、凝然と耳を傾けて居た多賀子は、涙ぐんだ目を徐と手巾に拭つて、

「其様な御事情でしたか？ 然く解りました。」と力を籠れて點頭さ、「貴女は實に孝子です！ 私も、貴女の立派なお意に感しました。併し、御兄様にも無理はありませんよ。」

「は、私も、兄を無理とは思ひませんけれど……。」

「然うすると……、今、金が要ると仰有りましたねえ？ それは、幾何許です？」

「は、」と藤子は濡れた眼を睜つたが、「悉な一時に要るんぢやございせんが、種々費るも

んですから、兄には、三十四請求しまして……。」

「然うですか？」と頭を動かし、「失禮ですけれど、其の金は私が出しませう。」

「えッ、奥様が……？」と驚くと、

「私が進ませせう……、この將來、阿母様の癒る迄の入費は、悉な私が進めますから、貴女のお心の濟む様に、充分手當をしてあげませう。」

「有難うございます……、奥様」と再涙が流れた、「此の御恩は、決して忘れません！ 私辭退しなうて戴きます！」

「恩も何も有るもんですか、貴女と私の間ですもの……。」と云つたが、急に氣の付いた様に「阿母様の病氣は壺扶斯でしたねえ！ ぢや傳染病だ！」と愕然として「貴女、傳染つたら大變ですよ。萬事、看護婦に頼んでね、決して傍へ寄つちや可けませんよ。」

「は。ち言葉ですけれど、看護婦にばかり任せて置けませんで……。」と藤子は母の狀態を想出して、「奥様、私、此う爲つてる中にも、何うなつてるかと氣遣はれますから、失禮ですけれど、今の金を何卒願ひます……。」

「え、進びますとも……。」「と多賀子は快よく椅子を離れて、我が室から其の紙幣を持って来て渡すのである。

(八)

それから多賀子は、服装も頭髮も其の儘で出やうと急ぐ藤子を止めて、侍女に順子をも呼ばせて、二人で別て髪を結ばせ、單物も着更へさせて、尙病氣の傳染ぬ注意を云ひ聴かせ、今迄に例なく、梯子の口まで送つて出して遣つたのである。

感慨に緊縮つた顔色をして、見送るとは無しに暫く其處に起つて居たが、頓て氣の着いた様に呼鈴を鳴して、侍女に政男を案内す可きを命じた。而して、直ぐ化粧室に入つて、兄妹の争ひを止めた時から其の儘に成つて居る姿を鏡に映したが、我と我が顔の蒼く、眼の色も常ならぬを覺つた。

「奥様、此方で坐らっしゃいますか……？」と呼ぶ聲が近付いて、侍女のお鈴が徐に紙門を開け、「奥様、新庄様は階下には居らっしゃいませんが。」

「居らっしゃらないッて？」と多賀子は、櫛を使ひながら振返つて、「お歸りに成つたの？伯母様の方ぢや無しの？」

「はい、お歸りに成つた御様子もございませませんが、彼方には居らっしゃいません。」「何うしたらう？ 順子様に聞いてござらんよ。」

「は、伺ひましたら…… 此様な事を仰りました。順子様が、先刻應接室へも出てになりましたらば、何ですか、大層お考への御様子なので、何も仰有らずに、其の儘お引遣しに成つた状でございます……。」

「豊夫、藤子様の跡を追つて、また叱つてる様な事もないだらうねえ……。」

「いゝえ、其様な事を……。」とお鈴は笑つて、「なんぼ御元氣でも、御門の外で貴女様……。」

「でも鈴、先刻の様子ぢや……。」「と多賀子は其事が氣になるらしく、急に化粧室を出て、

「ま、最う一度家人に聞いてござらんよ。」

「は、お尋ね申して参りませう……。」

「おッ、鈴」と欄干から見下す態を指して、「彼處に居らっしゃるぢや無いか？」

お鈴も欄干に近く寄つて、其の四阿屋の後の、薄暗い梅の樹の根方に、主人の呈八郎には
總領孫、多賀子には義甥に當る達夫と云ふ兒と、政男の後姿とを遙に發見けて、

「まア、何時の間にも出てになりましたらう……？」降つて居りませうに。」

「止んで居るやうだよ。」と多賀子も空を透して云つた。

「必然と、達夫様に強請られても出てに成つたんでせうよ。お伴れ申して参りませう。」と
急いで行かうとすると、

「可いよ、私が行かうよ。」

「お庭へてござりまするか？」と主人の顔を見上げたが、「此様なに濡りますから、お出遊は
さない方が……。」

「でも今日は、朝つから一遍も外へ出ないもの、少し位、反つて可いだらうよ。」と多賀子
は直ぐ階子を降りて、政男の居る其方へと庭下駄を運んだ。

小倉の袴の紐も緩んで、裾の地を曳くにも氣は着かず、梅の樹の下に並べてある、濡れて
る粗朶に腰を卸して、腕組を固く、頭をば重たさうに垂れて、凝然と我が足下を眺めて居
るのは政男である。

「よ、新庄様、探つても呉れッてばよ。」と其の達夫と呼ぶ兒は、枯黒い固肥りの顔を寄せ
て、高聲で強請つた。

「えい、煩い見だー」と顔を顰めて、「今探つて遣つたぢやないか。」

「今のは青かつたよ、彼方に在る赤るんだのを探つても呉れッてんだよ、おい、新庄様、
此畜生……。」と袖を曳く。

「まア彼方へ行つて居ろ、後で探つて遣るから……。」と袖を拂つたが、小兒を避け様とし
て起上ると、直ぐ横手から下駄の音して、美しい多賀子がお鈴を伴れて歩寄る。

「達夫様、何を強請つて居るの？」と先づ義甥に言葉を掛けた。

「あの、梅實一願探つて貰ひました。」と達夫は急に温順く成つた。

「や、」と政男は多賀子に目禮したが、「藤は何うしました？」

「藤子様、最う行きませしたよ。」と笑顔を作つて、「私が出して上げたんですの。」

「然うですか、おや母に……。」と云つて云ひ溢り、「今出ましたか？」

「いゝえ、最う少し前……。何を御用でしたか？」

「何、行つて了や關ひません。」と頭を掉つて云つて、凝と唇を結んだ。

「藤子様から悉皆伺ひましたが、貴方、何にも御立腹に成る事はないぢやありませんか……。」

政男は黙つて俯向いて居る。多賀子は四阿屋を顧みて、

「さア、彼處へ行きませう。」と云つてから、達夫の顔を覗いて、「貴方は彼方へ行つて居らっしゃい、ね。鈴、お前も一寸と彼方へ。」

「左様でございますか？ ては、お傘を彼處へ置きますから……。」「と侍女は急いで四阿屋に入つて、我が手巾ではたくと腰掛の埃を拂ひ、さて達夫の手を曳いて裏庭の方へ行く。その後へ、多賀子が先に立つて腰を卸すと、

「併し、御用なら彼方へ行つても宜うございますが……。」「と政男は起つた儘で云ふ。

「いゝえ、何卒此處で……。」「多賀子は、未だ妹の事を憤つて居るのか、唇は固く、眼は睨つて、今迄に無き不機嫌な顔色をしながら、厭々に腰を卸した政男を眺めて、「貴方のお妹だけあつて、藤子様は確固した方ですねえ、彼の美しい御心には、本當に感心致しましたよ！」

政男は其の言葉を意外らしく、顔は矯げたが口は利かぬ。多賀子は再、

「貴方がたの様に、情の厚い方がございませうか？ 私は、初めてお目に掛りましたわ……。」と凝然と政男を視詰めて、「此う云ふ方々とお親しくする事が出来て、私も何様な幸福なんでせう！」

「ては、藤は、何處までも御監督下さるのですか？」

「夫は仰有るまでも有りませぬわ……。」

「藤は、母が何う云ふ者と云ふ事は話し爲ませんかつたか？」

「阿母様のお身の上ですか、聴きましたとも、精しく……。」「と黙頭さ、實に、お氣の毒な

方ですわねえ！」